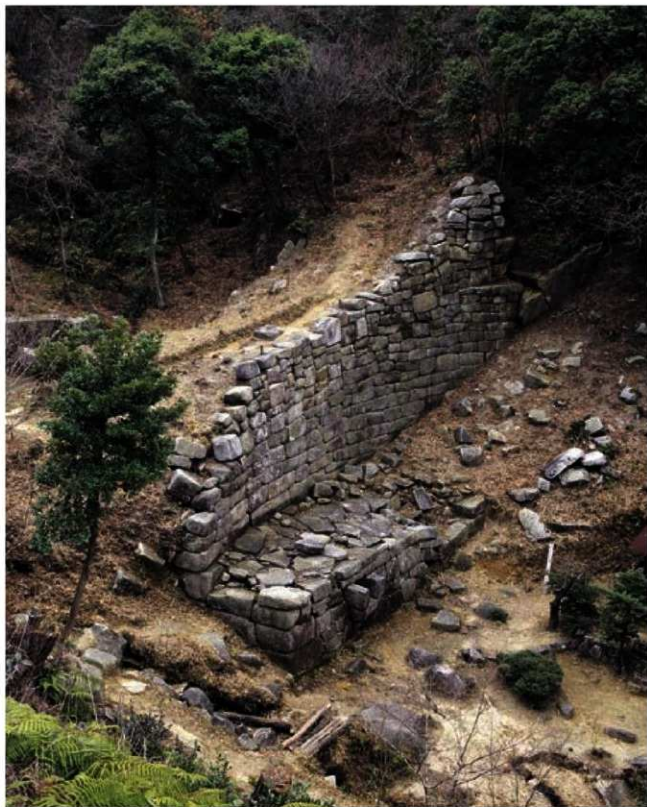


史跡 御所ヶ谷神籠石 I

—福岡県行橋市大字津積ほか所在古代山城の第1次～第11次調査—

2006年

行橋市教育委員会



中門跡



1. 北上空から見た遺跡全景



2. 景行神社と北麓を望む



1. 中門跡



2. 西門跡



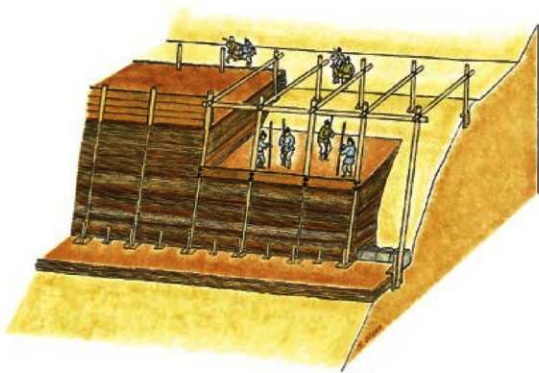
1. 北東から見た第2東門



2. 第2東門



1. A2トレンチ



2. 土塁築造復元図



1. A7 トレンチ



2. A9 トレンチ



1. B1トレンチ



2. C5トレンチ



1. C5トレンチ出土 土師器 坏



2. 第2東門出土 土師器 甕



3. 第2東門出土 須恵器 長頸壺

序

本市は周防灘に臨む京都平野の中央に位置しますが、この地は「みやこ」という呼称に示されるようにかつては豊の国の中心として栄えました。市内にはそれを物語る多数の史跡や文化財が遺されており、これらの文化財を活用した個性と潤いのあるまちづくりを積極的に推進しているところです。

なかでも豊かな自然のなかにたたずむ御所ヶ谷神籠石は、本市の文化財を代表するものであり、現在史跡自然公園整備に取り組んでいるところです。

発掘調査はこの史跡自然公園の整備に先立ち、遺跡の内容を把握するために平成5年度より実施してまいりました。

本書はこれまでの調査成果をまとめた報告書であります。この報告書が史跡の保存と整備や、謎を秘めた古代山城の研究の進展に資することができれば幸いです。

おわりに調査にあたり快くご協力いただきました地権者のみなさま、地元津積区、ご指導いただきました指導委員の先生方、文化庁、県文化財保護課のみなさまに心よりお礼申し上げます。

平成18年3月31日

行橋市教育委員会

教育長 徳永文昭

例 言

1. 本書は行橋市教育委員会が実施した史跡御所ヶ谷神籠石の第1次調査から第11次調査までの発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は平成5年度から平成15年度まで実施し、行橋市教育委員会 文化課 文化財保護係の小川秀樹が担当した。
3. 分布調査、補助事業事務等には調査担当者のほか、行橋市教育委員会 伊藤昌広、中原 博、辛嶋智恵子（現行橋市議会事務局）が携わった。
4. 本書に掲載した遺構実測図の作成には調査担当者のほか、一宮千恵 今村美香 内野陽子 北本悦子 木下孝子 木村玉美 工藤祥子 工藤美枝子 国永敏枝 坂本千恵子 佐藤愛子 島木邦子 田中すま子 谷口貞子 津田容子 中島裕子 平川倫広 平渡智生 広津宏一 本田久代 三井恭子 古木初子が従事した。
5. 本書に掲載した遺構・遺物写真は航空写真を除き、小川が撮影した。
6. 遺構図面の整理・遺物実測・トレースは、奥野康代、三仙恵理子、津田容子が行った。
7. 御所ヶ谷神籠石全域の地形測量は写測エンジニアリング株式会社に委託し航空測量（1/1000、コンター1m）を行ない、その他の地形測量は調査従事者が平板測量（1/100、コンター25cm）を行った。
8. 中門の立面図・平面図は株式会社パスコに委託し写真測量を実施し、平板測量等で補足した。
9. 本書に記載した高度値は海拔高である。
10. 遺構図の方位は特に記さない場合は座標北を用い、磁北の場合はその旨記した。
11. 本書における土層の色調については『新版標準土色帖』（農林水産省農林技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修）と、肉眼観察に基づく色調の二通りを表記している。
12. 本市周辺町村は平成17年から18年の合併で名称が下記のように変更となったが、本書では調査が行なわれていた時点で用いられていた旧町村名で記述した。

新町村名一覧

新町村名	旧町村名	合併日
みやこ町	勝山町	18年3月20日
	豊津町	
	犀川町	
築上町	築城町	18年1月10日
	椎田町	
コウツ上毛町	新吉富町	17年10月11日
	大平村	

13. 本書の執筆、編集は小川が行ない編集については奥野康代、三仙恵理子の協力を得た。

目次

第1章 調査の経緯と経過	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査組織	2
第3節 調査の経過	3
第2章 遺跡の概要	
第1節 位置と環境	5
(1) 地理的環境	5
(2) 歴史的環境	6
第2節 御所ヶ谷神龍石の研究史と概要	10
(1) 研究史	10
(2) 遺跡の概要	11
第3章 調査の記録	
第1節 調査の概要	13
第2節 外郭線の調査	15
(1) 調査概要	15
(2) 外郭土塁の調査	16
(3) 外郭線の石塁	32
(4) 小 結	34
第3節 城内列石線の調査	36
(1) 分布調査	36
(2) 発掘調査	39
第4節 城門の調査	41
(1) 中 門	41
(2) 東 門	47
(3) 第2東門	50
第5節 礎石建物跡の調査	57
第6節 出土遺物	60
第4章 結 語	63

図版目次

- 巻頭図版 1** 中門跡
- 巻頭図版 2** 1. 北上空から見た遺跡全景
2. 景行神社と北龍を望む
- 巻頭図版 3** 1. 中門跡
2. 西門跡
- 巻頭図版 4** 1. 北東から見た第2東門
2. 第2東門
- 巻頭図版 5** 1. A2トレンチ
2. 土塁築造復元図
- 巻頭図版 6** 1. A7トレンチ
2. A9トレンチ
- 巻頭図版 7** 1. B1トレンチ
2. C5トレンチ
- 巻頭図版 8** 1. C5トレンチ出土 土師器坏
2. 第2東門出土 土師器甕
3. 第2東門出土 須恵器長頸壺
- 図版 1** 遺跡遠景
1. 北から見た神龍石の山並み
2. 北上空から見た遺跡主要部
- 図版 2** 列石と土塁
1. 東門の北側
2. 東門の北側
3. 第2東門の南側
- 図版 3** A1トレンチ
1. 列石と柱穴の検出状況
2. 列石と柱穴の位置(上から)
- 図版 4** A2トレンチ
1. 上空から見たトレンチ(一部埋め戻し後)
2. トレンチ掘削風景
3. 土塁前面の柱穴と列石
4. 列石の検出状況
- 図版 5** A2トレンチ
1. 列石を覆う版築層とテラス部分の整地層
2. 背後から見たトレンチ
3. 土塁の版築土層
- 図版 6** A2トレンチ
1. 土塁背面の石積み
2. 背面の石積みと版築土層の関係
3. 土塁基底部から立ち上がる柱跡
4. 地山に掘り込まれた柱掘りかた
- 図版 7** A3・A4トレンチ
1. A3トレンチ(列石と柱掘りかた)
2. A3トレンチ西断面
3. A4トレンチ(列石と柱掘りかた)
4. A4トレンチ東断面
- 図版 8** A5トレンチ
1. A5トレンチ(右)とA6トレンチ(左)
2. 列石と版築土層
3. 列石と柱掘りかた
4. 列石を覆う版築層
- 図版 9** A6トレンチ
1. 列石と柱穴
2. 上から
3. 列石、柱穴と版築層
4. 列石を覆う版築層
- 図版 10** A7トレンチ
1. 列石と柱穴と土塁の土層
2. 地山に寄せられた後側の版築層
- 図版 11** A7トレンチ
1. 列石と柱穴
2. 列石を覆う版築層
3. 後側の土塁中から検出された柱穴
4. 土塁の後背面
- 図版 12** A8トレンチ
1. 列石と柱穴
2. 南側断面
3. 北側断面と掘りかたと柱跡
- 図版 13** A9トレンチ
1. 正面から
2. 東方向から
- 図版 14** A9トレンチ
1. 南壁断面

2. 北壁断面
3. 上から見た列石の接合状況
- 図版15** A12トレンチ
1. 列石と柱穴
2. 上から
- 図版16** B1トレンチ
1. トレンチと北側の平野
2. 版築土層と柱跡
- 図版17** B1トレンチとその周辺
1. 土塁の後側
2. 掘りかたと柱跡
3. 地山のバイラン土と掘りかた
4. B2トレンチ
- 図版18** 城内の列石(1)
1. 原位置に残る列石
2. 溪流部にある加工石材
3. 原位置から動かされた列石石材
- 図版19** 城内の列石(2)
1. 谷の西側の列石
2. 谷の西側の列石
3. 西外郭線近くの列石状石材
- 図版20** 城内列石線の調査(1)
1. C地区遠景
2. 調査中のC地区トレンチ
- 図版21** 城内列石線の調査(2)
1. C地区の調査状況(南西から)
2. C地区の調査状況(東から)
- 図版22** 城内列石線の調査(3)
1. C3トレンチ(西壁土層)
2. C3トレンチ(列石と柱穴)
3. C3トレンチ(柱掘りかた断面)
- 図版23** 城内列石線の調査(4)
1. C5トレンチ(北から)
2. C5トレンチ(石材と後背面の版築土層)
3. C5トレンチ(土師器坏片の出土状況)
- 図版24** 城内列石線の調査(5)
1. C6トレンチ(列石と柱穴)
2. C6トレンチ(列石と背後の版築層)
3. C1トレンチ 柱穴検出状況
4. C2トレンチ 柱跡検出状況
- 図版25** 中門(1)
1. 遠景
2. 俯瞰
- 図版26** 中門(2)
1. 西側の石塁
2. 石積みの手法
- 図版27** 中門(3)
1. 北西より
2. 西より
- 図版28** 中門(4)
1. 城内側の石積み
2. 取水口
- 図版29** 中門(5)
1. 東側の石塁
2. 土師器の出土状況
- 図版30** 西門(1)
1. 全景
2. 東側石塁
3. 西側石塁
- 図版31** 西門(2)
1. 城門側より望む
2. 東側背面の状況
3. 西側背面の石塁
- 図版32** 調査前の東門
1. 東門と列石線(北西上空から)
2. 城門周辺(真上から)
3. 城門側壁と土塁
- 図版33** 東門の調査(1)
1. 西から見た東門と土塁
2. 東門と土塁のトレンチ
- 図版34** 東門の調査(2)
1. 南から
2. 西から
3. 側壁の石積み
4. 石積みの状況
- 図版35** 東門の調査(3)

1. 調査前の北側壁
 2. 北側袖石の掘り下げ状況
 3. 基底部の列石検出
- 図版36** 東門の調査(4)
1. 門道部のトレンチ
 2. 土塁に設けたトレンチ(A12トレンチ)
 3. 柱跡の検出状況(A12トレンチ)
- 図版37** 第2東門の調査(1)
1. 北上空より
 2. 俯瞰
- 図版38** 第2東門の調査(2)
1. 調査前
 2. 横断面土層
 3. 崩落状況断面
- 図版39** 第2東門の調査(3)
1. 縦断面
 2. 側壁石材の崩落状況
 3. 側壁石材の崩落状況(後方から)
- 図版40** 第2東門の調査(4)
1. 南東側壁
 2. 北西側壁
 3. 城内に至る斜面
- 図版41** 第2東門の調査(5)
1. 袖石前面の柱穴
 2. 門道床面の整地層
 3. 門道床面の整地層
- 図版42** 第2東門の調査(6)
1. 須恵器長頸壺頸部出土状況
 2. 須恵器長頸壺胴部片出土状況
 3. 土師器甕片出土状況
- 図版43** 第2東門 北西土塁の調査(1)
1. 第2東門と北西側の土塁
 2. 版築土塁と列石
 3. 列石を被覆する版築土塁
- 図版44** 第2東門 北西土塁の調査(2)
1. 土塁前面の柱穴列検出状況
 2. 土塁後方の柱穴列
 3. A13トレンチで検出された柱堀りかた
- 図版45** 外郭線の石塁
1. 南東石塁
 2. 南東石塁と岩盤
 3. 東石塁
- 図版46** 礎石建物跡の調査(1)
1. 景行神社と礎石建物跡(西から)
 2. 景行神社と礎石建物跡(俯瞰)
- 図版47** 礎石建物跡の調査(2)
1. 調査前
 2. トレンチ調査状況
 3. 調査状況俯瞰
- 図版48** 礎石建物跡の調査(3)
1. 列石特有の面取り加工のある礎石
 2. 礎石と掘りかた
 3. 列石特有の面取り加工のある礎石
 4. 礎石と掘りかた
 5. 礎石と掘りかた
 6. 土師器の出土状況
- 図版49** 景行神社の石祠
1. 全景
 2. 台石正面の銘文
 3. 石祠背面、側面の銘文
- 図版50** 馬立場・ヒモヅル
1. 馬立場の石塁
 2. 石塁背後の湿地
 3. ヒモヅル
- 図版51** 出土遺物(1)
- 図版52** 出土遺物(2)

挿図目次

第1図	外郭線の調査	3
第2図	G P S測量風景	3
第3図	発掘調査指導委員の視察	4
第4図	御所ヶ谷神龍石の位置	5
第5図	行橋市の地質図(1/10000)〔太田正道・西村祐二郎・唐木田芳文調査、太田正道作図(行橋市史)上巻2004〕	6
第6図	京都平野の主要遺跡分布図(1/80000)〔国土地理院発行1/5000の地図を複製〕	7
第7図	石塚山古墳(1/2000)〔苅田町教育委員会「石塚山古墳発掘調査概報」苅田町文化財調査報告書第9集1988〕	8
第8図	甲塚方墳(1/1200)〔豊津町教育委員会「甲塚方墳」豊津町文化財調査報告書第13集1994〕	8
第9図	唐原山城跡(1/12000)〔大平村教育委員会「唐原神龍石」大平村文化財調査報告書第13集2003〕	8
第10図	椿市廃寺出土瓦	9
第11図	豊前国府跡(豊津町教育委員会提供)	9
第12図	豊前小倉領絵図〔小笠原文庫1077号〕	10
第13図	景行天皇の石祠と礎石(行橋市制50周年記念「ふるさと写真集」2004)	10
第14図	調査以前の中門	13
第15図	崩落石材の撤去(第2東門)	13
第16図	御所ヶ谷神龍石全体図(1/4000)	14
第17図	土塁線の調査状況	15
第18図	A 1～A 6トレンチ周辺地形図(1/400)	17
第19図	A 1トレンチ平面・立面・断面図(1/40)	18
第20図	A 2トレンチ平面・立面・断面図(1/80)	19
第21図	A 3トレンチ平面・立面・断面図(1/40)	21
第22図	A 4トレンチ平面・立面・断面図(1/40)	22
第23図	A 5トレンチ平面・立面・断面図(1/50)	23
第24図	A 6トレンチ平面・立面・断面図(1/40)	24
第25図	A 7トレンチ平面・立面・断面図(1/80)	26
第26図	A 8トレンチ平面・立面・断面図(1/40)	27
第27図	A 9トレンチ平面・立面・断面図(1/40)	28
第28図	A 12トレンチ平面・立面・断面図(1/50)	30
第29図	B 1トレンチ平面・断面図(1/80)	31
第30図	東石塁	32
第31図	南東石塁平面・立面図(1/50)	33
第32図	C地区トレンチ周辺地形図(1/300)	36
第33図	C地区トレンチ平面図(1/100)	37
第34図	C 2～C 6地区トレンチ断面図(1/60)	38
第35図	C 5トレンチ遺物出土状況図(1/60)	39

第36図	列石配置推定図(1/150)	40
第37図	中門周辺地形測量図(1/200)	43
第38図	中門石塁平面・立面・断面図(1/200)	45
第39図	中門西側石塁立面図(1/100)	46
第40図	東門周辺地形測量図(1/400)	48
第41図	東門平面・立面図(1/60)	49
第42図	東門周辺縄張り概念図(1/800)	50
第43図	第2東門周辺地形測量図(1/400)	51
第44図	南東壁の石積み	52
第45図	第2東門平面・立面・断面図(1/80)	53
第46図	第2東門周辺土塁石塁立面図(1/200)	54
第47図	第2東門周辺縄張り概念図(1/800)	55
第48図	第2東門床断面および遺物出土状況図(1/60)	56
第49図	景行神社周辺地形測量図(1/400)	57
第50図	礎石建物跡平面・断面図(1/80)	58
第51図	石祠の拓本と実測図(1/40)	59
第52図	出土遺物実測図①(1/3)	60
第53図	出土遺物実測図②(1/3)	61
付 図	御所ヶ谷神龍石全体図(1/2000)	

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

御所ヶ谷神籠石は、昭和28年の国史跡指定当時、まだ遺跡の全容は十分把握されておらず、史跡指定も当時地表面で確認されていた点に在る遺構を個別に指定したにすぎなかった。指定された遺構は中門、西門、東門の3つの城門、列石6箇所、西外郭線にある「見張」と呼ばれる巨石、城内にある「立岩」と呼ばれる巨石、「馬立場」の12箇所指定面積も10,880.1㎡にすぎなかった。

平成2年度、本市において御所ヶ谷神籠石周辺の史跡自然公園構想が浮上し、市教育委員会は遺跡の保護体制を充実させる必要から平成3年度、4年度に文化庁国庫補助事業を受け史跡御所ヶ谷神籠石保存管理計画策定事業を実施した。

保存管理計画策定委員会では史跡の保存管理上、以下の問題点が指摘された。⁽¹⁾

1) 指定地の狭小

御所ヶ谷神籠石は昭和初期の調査で確認された山中に点在する遺構を個別的に指定することにとどまっており、指定面積の10,880.1㎡は遺跡の総面積の3%に過ぎず、保存管理上極めて不十分といえる。

2) 指定地番と遺構の不一致

国土調査により地番の位置に変動があり、指定遺構が指定地番から外れてしまったものがある。

3) 公有化の未着手

管理や整備を行う上で史跡が公有化されていることが望ましいが、現在未指定地に一部農商務省の土地がある以外は指定地も含めすべて民有地である。

4) 遺構の保存状況

土砂流出により崩落した列石や、その危険性のあるものがある。石畳遺構も崩落したものや、石積みゆゆるみやほらみが生じ、危険な部分がある。

5) 調査状況

昭和初期の実測調査以来公的な調査が行われておらず、遺構の分布状況、構造等不明確な点が多く、神籠石の全体像が十分把握できていない。

こうした問題点を踏まえ、史跡の保存管理面では史跡の追加指定と公有化、遺構の保存修理の必要性が指摘され、史跡の活用面では遺構の復元的整備や遊歩道や便利施設の整備、周辺環境整備、市内他の文化財との一体的な整備構想の必要性が求められた。

そしてそれらの前提として、御所ヶ谷神籠石の実態把握のため詳細な調査が課題となった。

とりわけ神籠石全城を史跡指定するために、遺跡の範囲確認調査が急務となった。このため平成5年度より、文化庁と福岡県の補助を受けて御所ヶ谷神籠石においては初めての発掘調査を開始した。調査は遺跡の範囲を把握するため外郭土塁線の確認から着手した。

第2節 調査組織

調査組織は下記のとおりである。

御所ヶ谷神籠石発掘調査指導委員

小田富士雄（福岡大学名誉教授 福岡県文化財保護審議会専門委員）
石松好雄（下関市立考古博物館長 元福岡県教育庁指導第二部文化課長）
川本義継（豊津町教育委員会教育長 元行橋市文化財調査委員）

平成5年度～平成9年度

教育長 白石 壽
教育次長 加来 博
社会教育課長 浜島一義（5年度）・永岡正治（6～9年度）
文化係長 竹下和則（5年度）・西江文敏（6～9年度）
調査担当 小川秀樹 調査補助 内本重一（5年度 現苅田町教育委員会）

平成10年度～平成14年度

教育長 白石 壽（10年10月8日迄）・徳永文晤
教育部長 山内公二（10～11年度）・福田宏光（12年度）・武内 清（13～14年度）
生涯学習課長 永岡正治（10～11年度）・森敬太郎（12～14年度）・武末謙治（14年度）
生涯学習課長補佐 奥 広俊（13～14年度）
文化係長 西江文敏（10～11年度）・細川義之（12年度）・宮崎森義（14年度）
調査担当 小川秀樹

平成15年度～平成17年度

教育長 徳永文晤
教育部長 川野英生（15年度）・光畑浩治（16～17年度）
文化課長 奥 広俊
文化課長補佐 安中知治（16年度）
文化振興係長 宮崎森義（15年度）・中村愛晴（17年度）
文化財保護係長 小川秀樹（調査・整理担当）

発掘調査従事者

池永行雄 一宮千恵 井藤こずえ 井上信隆 今田千寿江 今村美香 岩鹿美恵 内野陽子
江藤常照 江藤久美子 大平明芳 大平菊雄 大平利生 岡 由紀 片桐公尾 門田照美
川本一正 川本正春 北本悦子 木下孝子 木村玉美 楠本ハマエ 工藤祥子 工藤美枝子
国永敏枝 坂下光雄 坂本千恵子 阪本尚江 佐藤愛子 佐藤裕子 島木邦子 末松節子
田中すま子 田中千津子 田中実雄 谷口貞子 塚内トシエ 津田容子 中島裕子 中園満子
西松光子 西松義高 西村チエ子 西本ケイ子 春本ちづる 平川倫広 平渡智生 広津宏一

藤田由美子 屏 悦子 屏 鹿治 屏 光義 本田久代 三井恭子 村上亜由美 森本豊美
森山和歌子 森脇世津子 山縣 栄 山口裕平 山下美代子 山本和子 吉木初子 吉兼美智子

調査にあたって下記の方々にご指導、ご教示をいただきました。記して感謝の意を表します。

赤司善彦 池辺元明 伊崎俊秋 磯村幸男 出宮徳高 梅崎恵司 太田幸博 小田和利
亀田修一 幸嶋眞治 川述昭人 川本英紀 北垣聡一郎 木下 修 木下 良 木太久 守
木村達美 木本雅康 草場啓一 葛原克人 栗原和彦 小池史哲 兒玉真一 坂井秀弥
狭川真一 佐藤浩司 島津義昭 末永弥義 杉原敏之 須原 緑 田中俊明 田中正日子
田上 稔 坪井清足 飛野博文 西谷 正 中村修身 乗岡 実 橋口達也 増測 徹
松尾洋平 水野正好 宮本一夫 向井一雄 村上幸雄 森井啓次 八巻孝夫 柳田康雄
矢野裕介 山村信榮 山元敏裕 横田賢次郎 横田義章 吉田東明 李 進熙 渡辺正気

第3節 調査の経過

平成5年度から実施した御所ヶ谷神龍石の発掘調査経過は下記のとおりである。

平成5年度（第1次調査）

行橋市域の外郭線を確認するため土塁推定線を伐採、トレンチを掘削し列石と版築土塁、柱穴群を確認する。列石は版築土塁に被覆され露出していないことが判明した。

中門を清掃し石塁の写真測量を実施。遺跡内の7地点にGPS測量により調査用3級測量基準杭を設置。

第2東門に設定したA10トレンチで須恵器長頸壺片が出土。

西門西側の外郭線で版築土塁を確認。

平成6年度（第2次調査）

外郭土塁線の継続調査。A2トレンチで版築土塁内の柱跡を確認。

西門周辺の外郭線で列石を持たない版築土塁を確認。

平成7年度（第3次調査）

外郭土塁線の継続調査。

景行神社の丘陵から西側外郭線まで伐採作業を行い城内列石群の分布調査を実施。その後トレンチ調査（C地区）を開始する。

平成8年度（第4次調査）

南尾根と西尾根を巡る外郭線確認のため、犀川、勝山両町の協力を得て下草の伐採と分布調査を実施。確認した列石や外郭線推定地は、後日測量委託し、1/1000地形図に記入し神龍石の範囲を確定する。

城内の列石線（C地区）の調査を継続するとともに礎石建物跡のある中央丘陵の伐採と地形測量を実施。礎石建物跡についても一部トレンチ調査を行った。



第1図 外郭線の調査



第2図 GPS測量風景

平成9年度（第5次調査）

中央丘陵の礎石建物跡の継続調査。景行神社の石祠の実測。

発掘調査の概要報告書を刊行。

平成10年度（第6次調査）

城内列石線（C地区）のトレンチを拡張し周辺の地形測量を実施。礎石建物跡、中門、C地区を対象にラジコンヘリコプターによる空中写真撮影。第2東門の調査を開始。

平成11年度（第7次調査）

中門から東門へ至る土塁線の平板地形測量を実施。A地区の埋戻し作業。第2東門の平板地形測量。礎石建物跡およびC地区の実測図面を作成。

平成12年度（第8次調査）

第2東門の継続調査。C地区のトレンチを拡張し新たに柱穴を確認。

平成13年度（第9次調査）

崩落石材を除去しながら第2東門の調査を継続し床面を検出。第2東門調査状況空中写真撮影。

平成14年度（第10次調査）

第2東門と周辺部の補足調査。第2東門周辺で土塁の後側の柱穴列を検出。南東石塁の平面、立面図作成。

東門の発掘調査を開始。

平成15年度（11次調査）

東門の継続調査。



第3図 発掘調査指導委員の視察

発掘調査と併行して平成5年度より神籠石周辺地域整備基本計画⁽²⁾を策定するとともに、市内全体の文化財の保存・活用の方針を示し、その中で御所ヶ谷神籠石を位置づけていく必要性から「文化財を活用したまちづくり基本構想」を策定した。⁽³⁾文化財に焦点をあてたまちづくり構想の策定は当時としては全国的にも画期的なことであった。

発掘調査と分布調査によって御所ヶ谷神籠石の範囲が確定されてからは、史跡の追加指定事務が進められた。遺跡が一市二町にまたがり、地権者も多いことから指定申請事務は難航したが、地権者の皆様方のご理解ご協力をいただき、平成10年9月11日、勝山町、厚川町域も含めた、431,594.9㎡が追加指定され、旧指定地とあわせて、442,475㎡が国指定史跡となった。

平成11年度からは史跡の公有化を開始し、平成16年度までに行橋市域の指定地のうち382,859㎡を公有化している。

註

- (1) 行橋市教育委員会「史跡御所ヶ谷神籠石保存管理計画策定報告書」行橋市文化財調査報告書第21集 1993
- (2) 行橋市教育委員会「史跡御所ヶ谷神籠石地域整備基本計画報告書」1994
- (3) 行橋市教育委員会「文化財を活用したまちづくり基本構想—みやこの音色が聞こえてくるまち—」1994

第2章 遺跡の概要

第1節 位置と環境

(1) 地理的環境

御所ヶ谷神籠石は行橋市の南西部、大字津積つづみに所在し一部は隣接する京都府犀川町の大字木山、京都府勝山町の大字大久保におよぶ遺跡である。神籠石のある山並みは現在も行政界になっているが江戸時代以前の郡境でもあり、尾根の北側が豊前国京都郡、南側が仲津郡（明治29年に京都郡に併合）であった。

行橋市は福岡県の北東部に位置する。市域は、三方を山に囲まれ東に周防灘を臨む京都平野の中央部を占める。南西部の山地を源とし周防灘に注ぐ小波瀬川、長峡川、今川、江尻川、祓川、音無川などの中小河川が平野を潤し豊かな穀倉地帯を形成している。平野の北側には周防変成岩類よりなる高城山（405.9m）や貫山（711.6m）が位置し、北西側には国指定天然記念物・平尾台カルスト（400～680m）の石灰岩台地が分布する。市の西部には塔ヶ峰（396.1m）、上矢山（364.0m）、勝山町・障子ヶ岳（427.3m）が連なる。平野の南部には真崎花崗岩類および周防変成岩類よりなる飯岳山（大坂山 573.0m）、ホトギ山¹⁾（246.9m）、馬ヶ岳（215.1m）、矢留山（93.9m）の山並みが東西に連なり、御所ヶ谷神籠石はこの山並みのホトギ山の北西部に築かれている。



第4図 御所ヶ谷神籠石の位置

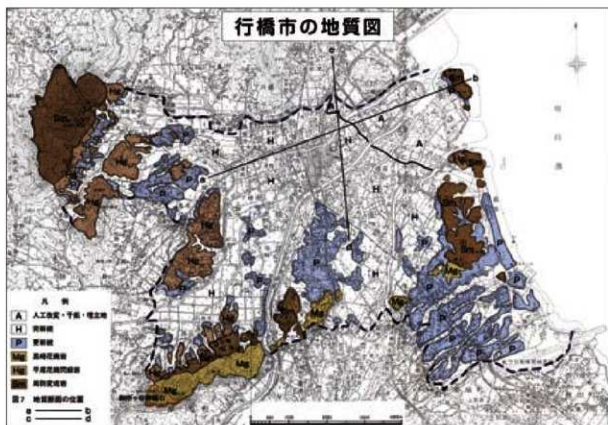
御所ヶ谷神籠石が築造された頃の京都平野の景観は現在と異なり、長峡川、今川、祓川が周防灘に注ぐあたりで海岸線が内陸部に湾入して行橋市街地周辺に大きな入江が形成されていた。こうした地形復元は主として自然地理学の研究成果に基づくが『類聚三代格』にみえる草野津が内陸部に比定されることもその傍証となっている。その後、河川が運搬堆積物と近世以降の干拓によって今日のような地理的景観が形づくられていった。

御所ヶ谷神籠石の立地する山塊は花崗岩からなる。北部九州に分布する花崗岩類は、主部花崗岩類と東部花崗岩類の二グループに大きく分けられている。行橋市域のものは、後者に属する真崎花崗岩と平尾花崗閃緑岩である。平尾花崗閃緑岩は御所ヶ岳北麓－矢留－杵尾を結ぶ線より北側の地域に、真崎花崗岩は御所ヶ岳－南泉三丁目－観山の線より南側の地域にそれぞれ分かれて分布する²⁾。（第5図）

御所ヶ谷神籠石はこのうち真崎花崗岩の分布域に属する。すぐ北麓には平尾花崗閃緑岩や周防変成岩が分布するが、神籠石の列石や石畳にはすべて真崎花崗岩が用いられている。

この山地は、花崗岩の風化に由来する酸性の貧養地で、植生の発達には良好ではないが、中門跡を中心としたアカマツ疎林の中には、ヒモヅルをはじめ、コブシ・タムシバ・ナツハゼ・ケナシアオハダ・カギカヅラなど分布上注目される種が散見される。このなかでもとくに注目されるのがヒモヅルである。ヒモヅルは、熱帯アジアに分布するヒカゲノカヅラ科のシダ植物で、御所ヶ谷の自生地は、1931年、

中村茂・吉岡重夫両氏によって発見された。現在、このヒモツルの群落は、中門の傍を北流する溪流両側の斜面に分布を広げ、キノボリヒカゲノカヅラの別名が示すように、アカマツヤリヨウブ・ヒサカキ・ナツハゼ・ネジキなどの幹や枝にからまって旺盛に生育している。(図版50-3)一時は、乱獲によって絶滅が危惧されたこともあるが、近年は幸いにも、群落の面積は拡大する傾向にある。ちなみに、本種は現在、絶滅危惧ⅠB類(環境庁・福岡県)に選定されている。⁽³⁾



第5図 行橋市の地質図 (1/10000)

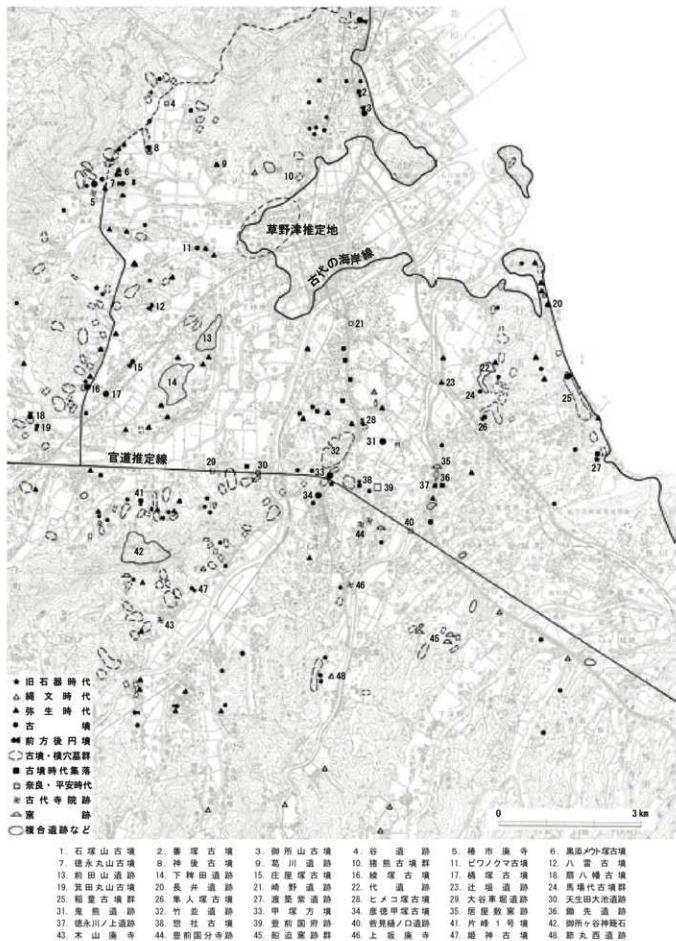
(2) 歴史的環境

京都平野で旧石器時代の遺物を出土した遺跡は近年増加し、各地で後期旧石器時代人の活動の跡が辿れるようになってきた。とくに周防灘沿岸部の渡築茶遺跡C地区⁽⁴⁾では、後期旧石器時代初頭の尖頭状石器、台形様石器、削器、剥片などが火山灰層中からまともに出土し注目される。縄文時代は後期の遺跡が中心であり、豊津町の節丸西遺跡⁽⁵⁾では大規模な縄文集落が調査されている。

弥生時代の遺跡は縄文晩期の夜白式土器や弥生時代初頭の板付Ⅰ式土器が出土する長井遺跡⁽⁶⁾や辻垣遺跡⁽⁷⁾を嚆矢とする。葛川遺跡⁽⁸⁾では環濠に囲まれた前期の貯蔵穴群が調査されている。下押田遺跡⁽⁹⁾は前期後葉の板付ⅡB式期から大規模化し後期まで続く京都平野の拠点集落である。

徳永川ノ上遺跡では弥生時代終末期から古墳時代初頭の10基以上におよぶ墳丘墓が確認されている⁽¹⁰⁾。これらの墳丘墓には後漢鏡を含む複数の鏡の副葬が認められ、有力な集団が出現していたことを示している。

3世紀末頃、全長130m、現存7面の三角緑神獣鏡を副葬した前方後円墳の石塚山古墳⁽¹¹⁾が築造さ



第6図 京都平野の主要遺跡分布図(1/80000)

れた。京都平野に九州でもいち早く本格的な前方後円墳が築かれたことは、北部九州と畿内の交流ルートの要衝に位置する本地域の地理的特徴を象徴的に示す事象である。その後5世紀中頃には全長118mの御所山古墳¹²⁹が築かれ、次いで6世紀初頭には番塚古墳¹³¹が築かれている。これらはいずれも瀬戸内海の海上交通を意識するかのよう周防灘沿岸部に位置している。その後、首長墓の築造は内陸部へと移り、6世紀前半から中頃にかけて大型前方後円墳である八雷古墳¹⁴、庄屋塚古墳¹⁵、扇八幡古墳が築かれる。このように豊前地域で最大級の前方後円墳が系譜的に築かれるのは京都平野の首長たちが豊前地域の豪族の中で傑出した勢力を保持していたことを示すものである。

京都平野は古墳からの甲冑の出土事例の多い地域でもある。甲冑を出土した古墳としては、石塚山古墳、御所山古墳、番塚古墳、猪熊1号墳、ピワノクマ古墳、稲童古墳群¹⁶、馬場代2号墳、長迫古墳などがあり、4世紀から5世紀にかけて強い軍事的性格を有した地域であったことを窺わせる。おそらく、朝鮮半島に対する大和政権の軍事的介入に際してその役割の一翼を担った地域であったのであろう。

磐井の乱の後、安閑2年(535)、豊前地域には5つの屯倉が置かれヤマト政権の支配体制が強化された。こうした状況を経て、6世紀中頃を過ぎると大型前方後円墳の築造は終息に向かい、地域の首長墓は旧京都郡においては、橋塚古墳(大型方墳)、綾塚古墳、旧仲津郡においては、彦徳甲塚古墳、甲塚方墳¹⁷といった巨大な横穴式石室を内部主体とする大型の円墳ないしは方墳に移行する。

また大型前方後円墳の衰退とほぼ時を同じくして群集墳や横穴墓の築造が盛んになり平野の山麓部や丘陵地帯に濃密な分布を見せる。これらの群集墳も一部を除いて神籠石が築かれる7世紀の後半にはほぼ築造を停止する。

7世紀後半、対外情勢の緊迫化にともない北部九州から瀬戸内海沿岸部に山城による国土防衛網が整備されるなかで九州北東部の周防灘沿岸地域にも御所ヶ谷神籠石と唐原山城跡(築上郡大平村)¹⁸が築かれた。

唐や新羅との緊張関係も緩和した7世紀末から8世紀前半にかけて豊前地域にも仏教寺院が盛んに建立されるようになる。8世紀前半までに京都郡に椿市廃寺¹⁹、仲津郡では上坂廃寺、木山廃寺²⁰が創建された。これらの寺院からは朝鮮



第7図 石塚山古墳 (1/2000)



第8図 甲塚方墳 (1/1200)



第9図 唐原山城跡 (1/2000)

半島系の瓦が出土するが、これは大宝2(702)年の豊前国戸籍断簡にも見えるように、6世紀以降豊前地域に進出してきた渡来系氏族秦氏とその管掌下にあった部民集団の存在と関係するのであろう。これらの渡来系集団が古代山城の築造において果たした役割にも興味が持たれる。

8世紀中葉には、豊津町岡作に豊前国府⁽²¹⁾が設置され、そのやや南に豊前国分寺⁽²²⁾が創建され、当地域は名実ともに豊前国の政治文化の中核としての機能を果たすこととなる。

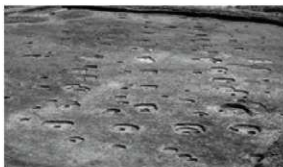


第10図 椿市廃寺出土瓦

ここで当時の交通路についてみていくと、大宰府から豊前国府を経て宇佐へ向かう西海道の古代駅路は御所ヶ谷神籠石の北麓を東西に走る。現在でも丘陵部に切り通しとしてその痕跡をとどめているが、近年そのルート上で発掘調査が行われ、大谷車堀遺跡、天生田大池遺跡⁽²³⁾、菅見樋ノ口遺跡⁽²⁴⁾などで駅路の痕跡が確認された。この駅路から分岐し山陽道に至るルートは神籠石の北西麓から北上し、刈田駅(京都郡苅田町)を経て津駅(北九州市小倉北区)へ向かうと推定されている。

一方、神籠石の南麓には仲津郡と田川郡を結ぶ伝路が想定されており⁽²⁵⁾、御所ヶ谷神籠石の立地はこの南北の主要交通ルートを抑えるうえで格好の立地といえる。御所ヶ谷の南麓の集落には木山(キヤマ)の地名が残るが、おそらく城(キ)山が転化したものであろう。

また、長峡川、今川、祓川の河口部に形成された入り江には草野津などの港津も存在し、築城地の選定にあたってはこうした面も意識されたと考えられる。



第11図 豊前国府跡

以上のように御所ヶ谷神籠石は古代豊前地域の中核を眼下におさめ、筑前から豊前を経て瀬戸内海へ至る重要な交通ルートを抑える要衝に位置することがわかる。こうした点から大規模な山城を築くに値する十分な立地条件を満たしていたといえる。

律令制度の弛緩にともない京都平野にも次々に荘園が成立するが、平安期成立の荘園としては宇佐神宮領の津熊庄や弥勒寺領の葛野庄、大野井庄など宇佐官関係のものが多い。

中世末期、この地域は大友、大内、毛利氏らによる争奪戦の舞台となった。御所ヶ谷神籠石の東に連なる馬ヶ岳には室町時代、京都平野の軍事の要となる馬ヶ岳城が築かれ、城をめぐる攻防戦が繰り返された。天正15年(1587)の豊臣秀吉による九州平定後、馬ヶ岳城には黒田如水が入城したが如水がほどなく拠点を中津に移したことで廃城となった。

その後、黒田氏の筑前移封にともない細川忠興が慶長5年(1600)豊前に入部。寛永9年(1632)細川氏が肥後に移った後、この地域は小倉小笠原藩領となり幕末を迎えた。

第2節 御所ヶ谷神籠石の研究史と概要

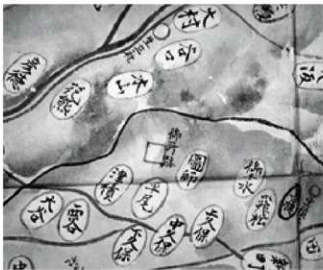
(1) 研究史

御所ヶ谷山中の石塁や礎石群の存在は江戸時代から知られており、元禄7年(1694)の貝原益軒の『豊国紀行』には、「むかし景行天皇十二年に筑紫に下り給ひ、此國の長峽縣に行宮をたてて住給ふ。故に京と名づけし由、日本紀に見へたり。其行宮の有し所は、上野の東、馬かたけの西、堤村の十町ばかり南にあり。今も礎有。天子の行宮有し故、此郡を京都郡と名づく。日本紀にも斯のことくかけり。」と記されている。この記事は御所ヶ谷を『日本書紀』にみえる景行天皇の長峽行宮とする考えが江戸時代前期すでに定着していたことを示している。その後、伊藤常足(『太宰管内志』)、西田直義(『柳村雜記』[筱舎漫筆])、高田吉近(『豊前国志』)、渡邊重春(『豊前志』)らがこの遺跡について言及しているが、伊藤常足以外はこの遺跡を長峽の行宮と考えていた。江戸時代後期に小倉藩が作成した『豊前小倉領絵図』(小笠原文庫蔵)にも「御所跡」と記入がみえ(第12図)、藩としてもそのように認知していたことが知られる。この地に与えられた「御所ヶ谷」の地名もこうした景行天皇行宮説に基づくものと考えられる。天保5年(1834)には地元の人々によって、礎石建物跡の中央に景行天皇を祀る石祠が建てられた。(第13図・第51図・図版49)

この遺跡が神籠石の一つとして認識されたのは明治41年(1908)のことで、これを学界に紹介したのは伊東尾四郎である^[27]。伊東は明治43年(1910)1月、喜田貞吉らとともに御所ヶ谷神籠石を踏査し、新たに門や列石を確認している^[28]。その後昭和初期に文化財指定申請のため遺構の実測調査が行われ、昭和28年11月14日、国の史跡に指定された。昭和40年代から近年にかけては定村實二^[29]、石田孝^[30]、向井一雄^[31]らによる踏査で新たに城門や列石などが発見されていった。

平成3年度より市教育委員会としても史跡の実態把握のため遺構の分布調査を実施するとともに航空写真測量による遺跡の千分の一地形測量図を作成した。平成5年度からは御所ヶ谷神籠石においては初めての発掘調査に着手し、平成9年度にそれまでの調査の概要報告書^[36]を作成した。

遺跡の範囲確定後、平成10年9月11日には未指定部分が史跡に追加指定され、御所ヶ谷神籠石のほぼ全域が国の史跡となった。



第12図 豊前小倉領絵図(部分)



第13図 景行天皇の石祠と礎石(昭和初期)

(2) 遺跡の概要

御所ヶ谷神籠石は行橋市と早川町の境をなす標高200m前後の尾根線の北斜面に広がる。城内の最高峰は南東端のホトギ山で、標高246.9m。外郭線が最も下る西門は標高65mでその差は180m以上あり高低差の大きな城といえる。外郭線は全周約3kmで、北側に向けて開く大きな二つの谷を城内に取り込んだ典型的な包谷式山城である。

外郭線は尾根稜線よりやや下がったところに土塁を巡らし、谷には排水機能を備えた石塁を築く。土塁は概ね幅約7m。高さは城外側で約5mである。土塁の圍繞形態を見ると、地形を巧みに利用し、意図的に屈折させながら連ねているため凹凸が多い。外郭線の全周はおおよそ3kmと考えられるが、第2東門の南東の急傾斜面からホトギ山頂付近を経て第2南門周辺までは版築土塁や列石が確認されていない。この一帯は急峻な地形で工事が困難なことに加え天然の要害で防御に支障をきたさないことから土塁などを構築しなかった部分もあることが推定される。

7箇所を城門は谷間に築かれ石塁をともなう大規模なものと同様に尾根線に設けられた小型のものに分けられる。大規模な城門は、北側の二つの谷に築かれた中門と西門である。

中門は谷を大規模な石塁で遮断し、石塁の東端付近に幅6mの城門を設けている。現在、城門部分には溪流が流れており、未調査のため門礎等の有無は不明である。城門の西側の石塁は長さ約18mで高さは約7m。二段に築造された石塁の下段に通水用の石樋を突出させた構造は朝鮮式山城の城門のなかでも異彩をはなつ。石積みは横長の石材を布積みした精巧、堅緻な石塁である。

西門も中門と同じく、大きな谷を石塁で遮断する雄大な遺構である。中門より崩壊が著しいが、石塁は谷を遮るように幅約40mにわたり構築されていたようである。未調査のため城門の規模、構造は不明である。西門の石塁には中門のような段築はなく、石積みの手法も重箱積みで中門とは異なる。こうした構築法の違いや石積みに列石石材が転用されていることから西門を後世の築造とする見解もある。⁽³²⁾

城の防御正面であるこの二つの城門は攻撃側と防御側との比高差が大きく、また城門の左右の土塁が城外に張り出し、城門に迫る敵兵に左右から弓矢などで効果的に攻撃できるように設計されている。尾根線に設けられた東門、第2東門、南門、第2南門、第2西門は、中門、西門のような大規模な石塁はともなわず門道の幅も3～4m程度と推定される。

城内の遺構としては礎石建物跡、馬立場石塁、城内列石群などがこれまでに知られている。礎石建物跡は城内中央を南北に伸びる尾根の削平地にある3間×4間の総柱建物跡である。列石の転用が認められ、中世山城関係の遺構とも考えられてきたが⁽³³⁾、それを積極的に裏付ける知見はなく古代山城にともなう遺構である可能性も残す。馬立場の石塁は礎石建物跡のある丘陵の西側の谷にある。この場所はその由来ははっきりしていないが古くから「馬立場」と呼ばれていたようである。ここに谷を遮るように外観石塁状の遺構が築かれている。石積みは割石を野面積みしたものだが、土塁の外面に石を貼ったものか芯部まで石積みなのかは未調査である。これも礎石建物同様中世の遺構とされてきたが、類似する石積みが中門背面にも見られ、石塁後背地の湿地などの状況から古代山城にともなう貯水施設の可能性を有する。

城内に連なる列石群は、定村責二らの踏査で確認され二重の塁線と認識されてきた。この列石群については一部トレンチ調査した結果、未完成の土塁線であることが確認された。

- (1) 国土地理院の地図には御所ヶ岳と記載されるが、古くはホトギ山やホトギヶ辻と呼ばれていた。渡邊重春の「豊前志」には、「此處の土中より瓮（ほとぎ）を出す。故、瓮辻と云ふを並りて、今は佛辻と云ふ」とあり土器類の出土を伝えている。山麓に生まれた幕末の漢詩人村上山山の号はこの山からとったものである。本書ではホトギ山の山名を用いる。
- (2) 太田正道 第1編 第4章 第1節「行橋地域の地質概観」『行橋市史』上巻 2004
- (3) 畑中健一 第1編 第5章「植物」『行橋市史』上巻 2004
- (4) 平成11年、12年に行橋市教育委員会が調査
- (5) 豊津町教育委員会「豊前国府および筋九西遺跡」豊津町文化財調査報告書第9集 1990
- (6) 小田富士雄「福岡県行橋市海岸の弥生式墳墓」『九州考古学』11・12 1961
定村貴二・小田富士雄「福岡県長井遺跡の弥生式土器」『九州考古学』25・26 1965
- (7) 福岡県教育委員会「辻垣ヲサマル遺跡」椎田道路関係埋蔵文化財調査報告第1集 1993
福岡県教育委員会「辻垣高田・長通遺跡」椎田道路関係埋蔵文化財調査報告第2集 1994
- (8) 苅田町教育委員会「葛川遺跡」1984
- (9) 行橋市教育委員会「下俣田遺跡」行橋市文化財調査報告書第17集 1985
- (10) 福岡県教育委員会「徳永川ノ上遺跡Ⅱ」椎田道路関係埋蔵文化財調査報告第7集 1996
- (11) 苅田町教育委員会「石塚山古墳発掘調査概報」苅田町文化財調査報告書第9集 1988
- (12) 苅田町教育委員会「史跡御所山古墳保存管理計画策定報告書」1976
- (13) 苅田町教育委員会・九州大学文学部考古学研究室「香塚古墳」苅田町文化財調査報告書第20集 1993
- (14) 行橋市教育委員会「八雷古墳」行橋市文化財調査報告書第14集 1984
- (15) 小田富士雄ほか「福岡県京都郡における二古墳の調査」福岡大学考古学研究室研究調査報告第3冊 2004
- (16) 行橋市教育委員会「福童古墳群」行橋市文化財調査報告書第32集 2004
- (17) 豊津町教育委員会「甲塚方墳」豊津町文化財調査報告書第13集 1994
- (18) 大平村教育委員会「唐原神籠石Ⅰ」太平村文化財調査報告書第13集 2003
- (19) 行橋市教育委員会「樺市魔寺」行橋市文化財調査報告書第8集 1980
行橋市教育委員会「樺市魔寺Ⅱ」行橋市文化財調査報告書第24集 1996
- (20) 犀川町教育委員会「木山魔寺跡」犀川町文化財調査報告書第1集 1975
- (21) 豊津町教育委員会「豊前国府」豊津町文化財調査報告書第3.4.5.8.10.11.12.13集 1985～93
- (22) 豊津町教育委員会「史跡豊前国分寺跡」豊津町文化財調査報告書第16集 1995
- (23) 福岡県教育委員会「天生田大池遺跡」福岡県文化財調査報告書第137集 1999
- (24) 豊津町教育委員会「柝見樋ノ口遺跡」豊津町文化財調査報告書第22集 2000
- (25) 水下良「古代官道と桑里制」『香春町史』上巻 2001 木本雅康「古代の官道」『行橋市史』上巻 2004
- (26) 行橋市教育委員会「史跡御所ヶ谷神籠石」行橋市文化財調査報告書第26集 1998
- (27) 伊藤尾四郎「豊前京都郡の神籠石及石門に就きて」『歴史地理』第11巻第5号 1908
- (28) 宮崎栄雅「豊前御所谷神籠石探検記」『歴史地理』第15巻第3号 1910
- (29) 定村貴二「御所ヶ谷神籠石」『北九州瀬戸内の古代山城』1983
- (30) 石田孝「神籠石は祭祀施設である」『筑紫』第91号 1981
- (31) 向井一雄「御所ヶ谷山城新発見遺構について」『溝巻』2 1992
- (32) 前掲 (30)
- (33) 前掲 (29)

第3章 調査の記録

第1節 調査の概要

本章では平成5年（第1次）から15年（第11次）までに実施した御所ヶ谷神籠石の調査の内容を報告する。調査経過は第1章で年次を追って記したが、調査報告は煩雑さを避けるため、年次に分けて遺構ごとに記述することとする。

平成5年度から平成15年度までの調査は以下の目的に沿って実施された。

- ①史跡全域の追加指定に向けて遺跡の範囲を確定する。
- ②城内に残る遺構を把握するとともにその内容を確認する。
- ③城門遺構の現況を把握し、門構造を確認する。

調査の対象とした遺構は次の通りである。

外郭線 行橋市域の外郭線約1.1kmを対象としたトレンチ調査（16地点）と平板地形測量
厚川町・勝山町域の外郭線を対象とした分布調査及び測量調査

城内列石線 分布調査及びトレンチ調査

城門

- ・中門 写真測量及び平板地形測量
- ・東門 周辺地形測量及び発掘調査
- ・第2東門 周辺地形測量及び発掘調査

礎石建物跡 周辺地形測量及びトレンチ調査

調査にあたっては遺跡の確認調査という趣旨から範囲確認と現況把握を第一とし、遺構の現況をできるだけ損なうことのないよう配慮した。

そのため分布調査、地形測量、石畳の現況測量などに重点を置き、遺構にトレンチを設定する場合も必要最小限の面積に止めた。また城門部の調査においても掘削が遺構の崩壊を招くおそれがある場合、遺構の全容確認は将来実施される整備段階の調査に委ねた。

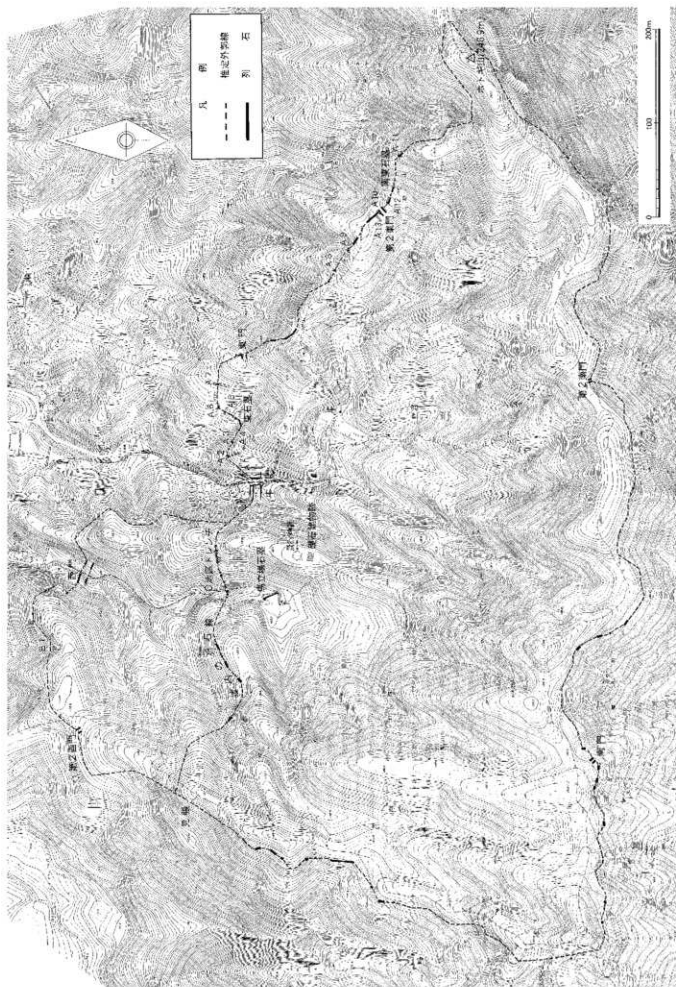
これは遺構の保護という理由以外にも現状では御所ヶ谷神籠石の内部に重機などの搬入ができないことから、掘削から埋め戻しまですべて手作業で行う必要があった点も大きい。こうしたことから、今回の調査内容と調査結果については随所に隔靴搔痒の感が拭えぬものとなったが、上記のような調査の趣旨を理解いただき諒されたい。



第14図 調査以前の中門



第15図 崩落石材の撤去（第2東門）



第16図 御所ヶ谷神籠石全体図 (1/4000)

第2節 外郭線の調査

(1) 調査概要

外郭線の調査は遺跡の範囲確認のため最も優先して行なったものである。

御所ヶ谷神籠石の外郭線については先学の踏査によりいくつかの図が作成されている^①。また市教育委員会でも史跡の保存管理計画策定にともない平成3年度に航空測量で作成した千分の一地形図をベースに遺構分布図を作成した。^②しかし御所ヶ谷神籠石の外郭線は深い藪に覆われた部分が多く、列石もその多くが埋没していたことから踏査のみで外郭線を確認することには限界があった。こうした面から土塁の圍繞状況を把握するためにトレンチ調査の必要性が生じた。トレンチ調査の対象としたのは行橋市域に属する約1.1kmの外郭推定線であるが、列石が露出した部分は少なかったため地形から外郭線を推定し伐採作業を行い、版築土塁や列石を確認するためのトレンチを設定した。

調査区は中門を基点に推定外郭線を東西に分け、東側をA区、西側をB区としトレンチ番号にそれぞれの調査区のアルファベットを冠した。外郭線確認のためのトレンチは中門から東側に12箇所、西側に2箇所設定した。これらトレンチは列石の確認のため主として土塁の前面に設定したがA2、A7、B1トレンチでは土塁の後方まで延長し土塁の後背面の状況を確認した。城門部以外の外郭線は基本的に一段の列石を基礎とする土塁によって構成されるが、石材を積み上げた石塁遺構も2箇所確認されている。

御所ヶ谷神籠石の推定外郭線の西側と南側はそれぞれ勝山町、厚川町の町域となるためこれらの部分については発掘調査は行わず、それにかえて下草刈を行い両町のエド教育委員会の協力を得て綿密な踏査を行った。この部分は土塁の流失が著しいため露出した列石が点在しており、それらを結ぶことにより外郭線を推定することができた。

推定外郭線のうちA12トレンチからホトギ山、第2南門を経て第2南門の西300m地点まで今のところ土塁や列石は確認されていない。したがってこの間の外郭線は地形から推定する以外にない。眺望良好なホトギ山の山頂部を取り込んで尾根の端部を巡る外郭線を想定したが、築城者の意図した城域と大きく隔たることはないと思われる。

土塁や列石が確認できないのはそれらが滑落した部分もあろうが、この一帯が御所ヶ谷神籠石の中でも最も急峻な地形であるため天然の要害に頼み、土塁、石塁等を構築しなかった部分もあると推測される。唯一東の尾根伝いにホトギ山に向かって来る敵に対しての防御が脆弱な印象を受けるが、現況で尾根に堀切跡などは認められない。こうしたものや防護柵などの施設の確認は今後の調査課題である。

以上のことから御所ヶ谷神籠石の外郭線の総延長は3km。うち土塁や列石の存在が確認されている部分は2kmであるといえる。



第17図 土塁線の調査状況

(2) 外郭土塁の調査

A1 トレンチ (第18図・第19図・図版3)

中門の東端より約20m東側の土塁推定線の斜面に設定した幅1m、長さ3mのトレンチである。

土塁の前面には崩落土が厚く堆積し、版築土塁がブロック状に崩れ落ちた状況も認められた。崩落土を除去すると版築土塁、列石、柱穴が検出された。この地点は中門から外郭線が東の丘陵に登っていくところで列石も地形に沿って傾斜して連なる。この場合、列石自体を地形にあわせて傾けて配置しており、したがって石材間の接合目地も傾いている。列石前面上縁部には神籠石の列石に特徴的なL字状の面取り加工(段差調整加工)が施されている。また列石の前面は平滑に調整されている。

列石前面のテラスは流出しているが地山の上に数層の基礎整地層を敷き、その上に列石を設置している。版築土は花崗岩風化土で、一層の厚さは5～8cm程度で、列石周辺は非常に堅くしまる。

土塁と直交する縦断面の版築土層は水平に積まれるが、土塁と平行する横断面の土層は列石の傾きにあわせるように傾斜して積まれている。また横断面の土層には斜め方向の区切りが見られ、上層と下層とで積み土の傾斜も異なり、版築工事の工程差を示すものと考えられる。

トレンチ北壁断面では版築土が列石を被覆する状況が明瞭である。柱穴は近接して2本検出され、いずれも不整形の掘りかたを地山に掘削し柱を立てる。柱は列石と近接する位置に立てられるものと列石からやや離れた位置に立てられるものがあり、前者の柱は径約25cm、後者は22cmである。

北壁断面の柱の傾きは70度。土塁前面の傾斜角度は67度で柱の傾きにはほぼ対応する。列石の前面はほぼ垂直に立ち上がり柱や土塁の傾斜とは対応しない。柱穴周辺には柱を支えたものと思われる添石も検出された。

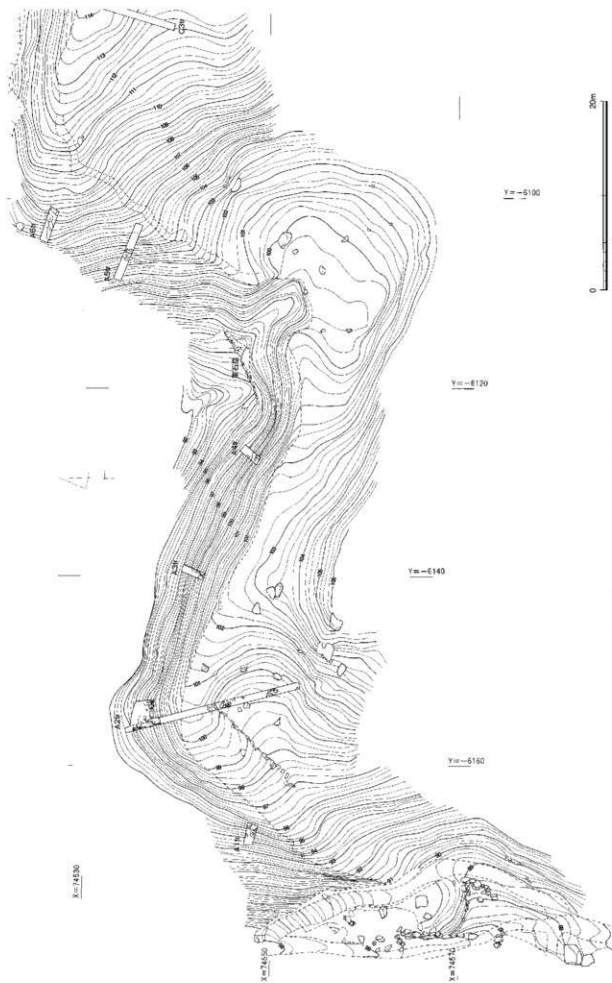
A2 トレンチ (第18図・第20図・巻頭図版5・図版4・5・6)

中門の東北約40mの土塁が南に屈曲する部分に設定した。前面には土塁の崩落土が厚く堆積していたが、それを除去すると残存する版築土塁が現れた。土塁前面から背面の石組みまでの基底部幅7.5m、前面の整地面から現況の土塁頂部までの高さ4.8mを測る。この地点では土塁が大きく東へ屈曲するが列石は弧を描いて連なり、いわゆる「折れ」は認められない。

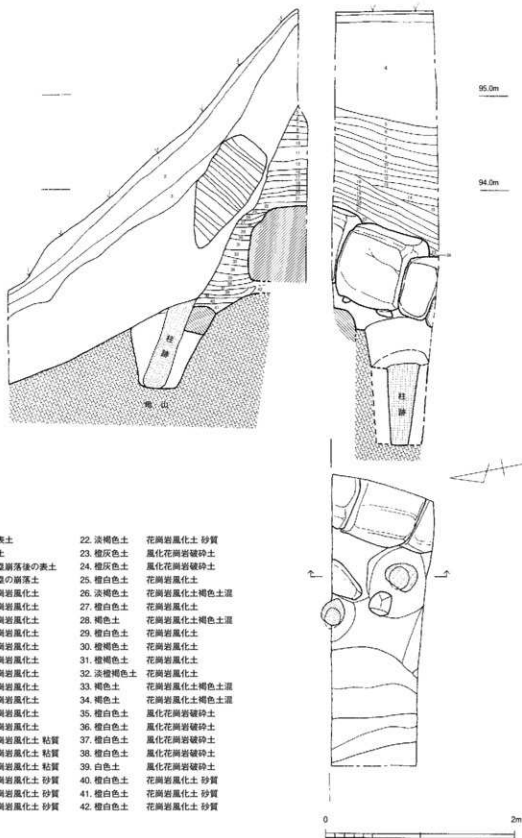
列石の城外側に版築状に搦き固められたテラスが造成される(基礎整地層)。列石の前面は平滑に仕上げられるが、基礎整地層に覆われた下部は粗削りの状態が残ることからこの加工は列石を配置しテラスを造成する過程でなされたものとみられる。基礎整地層の11層にこの際生じたと考えられる石屑が搦き込まれている。

前面のテラスでは6個の柱穴とその掘りかたを検出した。P1、P2とP4、P5の柱はそれぞれ同じ掘りかたに立てられる。列石寄りのP1とP4は径約30cmで、柱間は180cm。その外側に並ぶP2、P3、P4は径約20cm、柱間は80cmと110cmである。P6は径28cmで別の掘りかたに立てられている。掘りかたの切り合いをみるとP6はP4、P5に先行して立てられている。P6の外側にはさらに別の掘りかたもみえる。

前面土塁の断面を見ると土圧によりずれが生じているものの版築土は列石を覆い列石寄りのP1、P2にまで達している。こうした状況を見る限り版築の堰板は列石寄りの柱(P1、P2)の背面に取り付けられたと考えざるを得ない。外側に短い間隔で並ぶ小型の柱(P1、P2、P3)は堰板の押

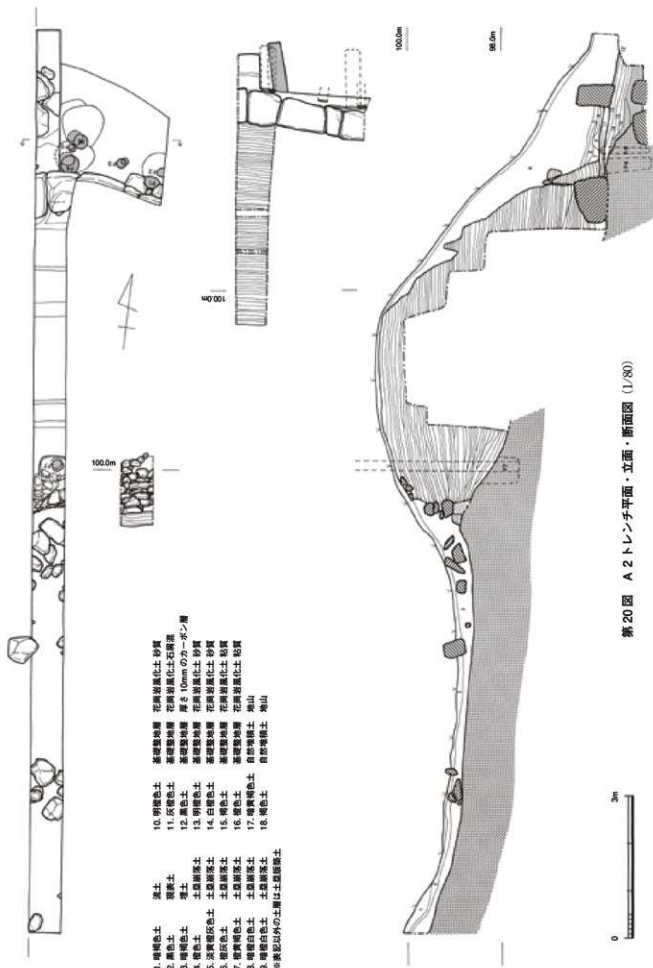


第18図 A1~A6トレンチ周辺地形図 (1/400)



- | | | | |
|-----------|-----------|-----------|------------|
| 1. 黒色土 | 現表土 | 22. 淡褐色土 | 花崗岩風化土 砂質 |
| 2. 暗黄褐色土 | 流土 | 23. 橙灰色土 | 風化花崗岩破砕土 |
| 3. 黒褐色土 | 土層崩落後の表土 | 24. 橙灰色土 | 風化花崗岩破砕土 |
| 4. 黄褐色土 | 土層の崩落土 | 25. 橙白色土 | 花崗岩風化土 |
| 5. 明褐色土 | 花崗岩風化土 | 26. 淡褐色土 | 花崗岩風化土褐色土混 |
| 6. 橙褐色土 | 花崗岩風化土 | 27. 橙白色土 | 花崗岩風化土 |
| 7. 明橙褐色土 | 花崗岩風化土 | 28. 褐色土 | 花崗岩風化土褐色土混 |
| 8. 橙褐色土 | 花崗岩風化土 | 29. 橙白色土 | 花崗岩風化土 |
| 9. 淡橙褐色土 | 花崗岩風化土 | 30. 橙褐色土 | 花崗岩風化土 |
| 10. 橙褐色土 | 花崗岩風化土 | 31. 橙褐色土 | 花崗岩風化土 |
| 11. 淡橙褐色土 | 花崗岩風化土 | 32. 淡橙褐色土 | 花崗岩風化土 |
| 12. 淡橙褐色土 | 花崗岩風化土 | 33. 褐色土 | 花崗岩風化土褐色土混 |
| 13. 橙褐色土 | 花崗岩風化土 | 34. 褐色土 | 花崗岩風化土褐色土混 |
| 14. 淡橙褐色土 | 花崗岩風化土 | 35. 橙白色土 | 風化花崗岩破砕土 |
| 15. 淡橙褐色土 | 花崗岩風化土 | 36. 橙白色土 | 風化花崗岩破砕土 |
| 16. 黄褐色土 | 花崗岩風化土 粘質 | 37. 橙白色土 | 風化花崗岩破砕土 |
| 17. 淡黄褐色土 | 花崗岩風化土 粘質 | 38. 橙白色土 | 風化花崗岩破砕土 |
| 18. 黄褐色土 | 花崗岩風化土 粘質 | 39. 白色土 | 風化花崗岩破砕土 |
| 19. 淡橙褐色土 | 花崗岩風化土 砂質 | 40. 橙白色土 | 花崗岩風化土 砂質 |
| 20. 淡橙褐色土 | 花崗岩風化土 砂質 | 41. 橙白色土 | 花崗岩風化土 砂質 |
| 21. 淡橙褐色土 | 花崗岩風化土 砂質 | 42. 橙白色土 | 花崗岩風化土 砂質 |

第19図 A1トレンチ平面・立面・断面図 (1/40)



- | | | | | |
|---------|-------|-----------|--------|-----------------|
| 1. 暗褐色土 | 泥土 | 10. 暗褐色土 | 基壇築造地層 | 花崗岩風化土 砂質 |
| 2. 褐色土 | 礫土 | 11. 灰褐色土 | 基壇築造地層 | 花崗岩風化土 石灰質 |
| 3. 褐色土 | 埴土 | 12. 褐色土 | 基壇築造地層 | 厚さ 10mm の2層-ボン層 |
| 4. 褐色土 | 土層築造土 | 13. 河原色土 | 基壇築造地層 | 花崗岩風化土 砂質 |
| 5. 灰褐色土 | 土層築造土 | 14. 白褐色土 | 基壇築造地層 | 花崗岩風化土 砂質 |
| 6. 灰褐色土 | 土層築造土 | 15. 褐色土 | 基壇築造地層 | 花崗岩風化土 粘質 |
| 7. 暗褐色土 | 土層築造土 | 16. 褐色土 | 基壇築造地層 | 花崗岩風化土 粘質 |
| 8. 暗褐色土 | 土層築造土 | 17. 厚質褐色土 | 自然堆積土 | 堆山 |
| 9. 暗褐色土 | 土層築造土 | 18. 褐色土 | 自然堆積土 | 堆山 |
- ※表記以外の土層は土層築造土

第20図 A2トレンチ平面・立面・断面図 (1/80)

さえの支柱や版築工事の際の足場の支柱などの用途が考えられるが、ほかの柱より先に立てられたP6の用途は判然としなない。A3トレンチでも切り合う柱掘りかたが検出されている。(第21図)また城内の列石線の調査(C地区)で検出された柱跡群も同じような位置に立てられている。工事後、列石は版築土に覆われて完全に隠れ、また列石寄りの支柱(P1、P4)も版築土に埋め込まれた状態で残されたと考えられる。この柱を土壘上に突出させれば姫壇の支柱として利用することもできる。外側の小型の柱は工事後切断し撤去されたと推定される。なお、柱穴に面取りされた柱の形状の痕跡を明瞭に残すものがあり、柱は形を整えられて使用されたことがわかる。またP1、P4では柱穴の底から炭化物が多量に検出されており、柱の根腐れ防止のため、柱の下部を焼いた可能性がある。

柱穴は土壘の前面だけでなく背面に近い土壘中からも検出された。後方の柱は土壘の後端から約1m内側で検出された。掘りかたは60×60cmの略方形で土壘基盤の地山に掘削されている。したがってこの柱は土壘完成後に立てられたのではなく、版築工事の過程において必要とされたものと推測される。おそらく前面の堰板の支柱と繋ぎ、これが版築の土圧で傾くのを防止するためのものだと考えられる。(巻頭図版5)版築の積み土の一層の厚さは3cmから12cm。土壘前面の壁面では82層の版築土層が観察された。積み土に地山の花崗岩風化土が用いられ、粒子の粗い土と細かい土が数層ずつ交互に積まれる。基底部から1mくらいの高さまでは風化花崗岩を砕いたような土を多用し、特に入念に搗き固められており、手鋸で掘削した際、火花を生じるほどに強固に締まっていた。

A2トレンチ周辺では土壘の背面には数層の版築土上に割石を積み上げた石組がみられる。版築の土層はこの石組みまで伸びているが、水平堆積ではなく紡錘形を呈しこの石積みに向かって収束する状況を示す。この石積みが後側の堰板の役割を果たしていたか、あるいは版築層を削って石積みを行なったかを確認するためには土壘後背部の詳細な調査が必要である。

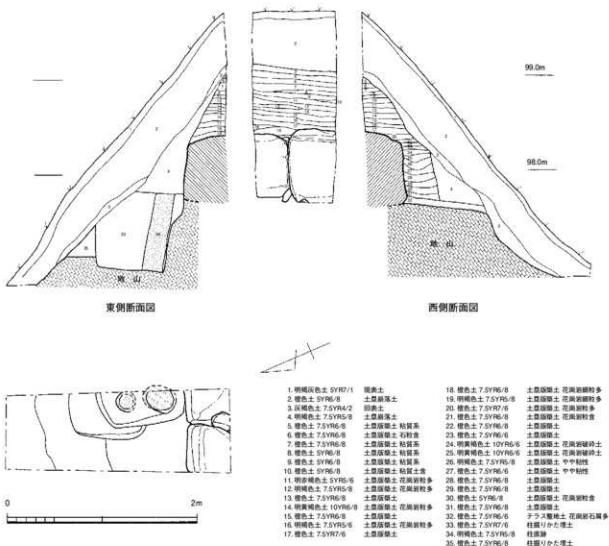
前述したように土壘前面では比高差4.8mを測るが、後側も地山から土壘の天端まで約18mの高さを有している。後背面の石積みはA2トレンチから中門に向かって15mほど続くので、この間の土壘は夾築式に築かれているのであろう。A2トレンチの東側で石積みは途絶え、これより東側の土壘は平坦なまま後方の丘陵に連続する内托式に切り替わる。

A3トレンチ

A2トレンチから15m東の土壘斜面に設定した、幅0.8m、長さ2.4mのトレンチである。トレンチからは列石、版築土壘、柱穴を検出した。列石は前面を平滑に調整し、西側の列石石材の前面上縁部には段差調整加工が認められる。

版築土壘は花崗岩風化土で、一層の厚さは3～7cmで非常に堅緻にしまる。横断面の土層は東に向かってゆるやかに上昇し、連続せずに終息する土層が4層(8、10、13、18)みられる。地山を削り出して設けられた土壘前面のテラスの東壁側で一辺80～90cmの略方形の二つの掘りかたが切り合っで検出された。列石から離れた掘りかたが先行して掘削されているがこれはA2トレンチのP6と同様のものと考えられる。列石側の掘りかた(深さ85cm)では2本の柱跡が確認された。このうち列石寄りの柱は径約25cm、外側の柱は径約20cm。列石前面の傾斜は85度から86度。柱、土壘の傾きは80度で三者はほぼ対応する。

トレンチ調査は土壘基底部に限定したため上部の構造は明確ではないが、周辺地形からこの部分の土壘の形状は内托式であると推定される。

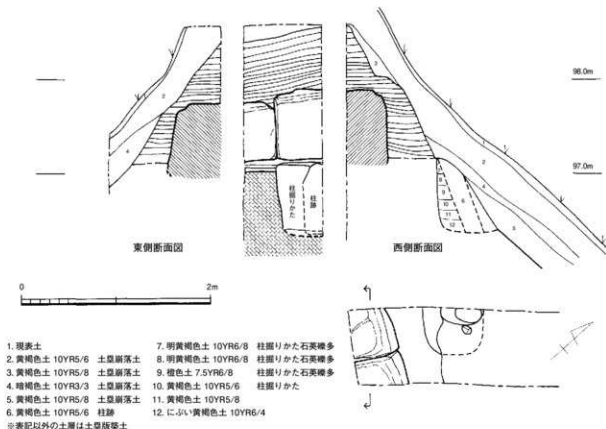


第21図 A3トレンチ平面・立面・断面図 (1/40)

A4トレンチ (第18図・第22図・図版7)

A3トレンチの東、土塁線が東石塁のある谷に降りていく地点に設定した。トレンチは幅0.8m、長さ2.5mで、列石、版築土塁、柱穴を検出した。2個の列石は前面を平滑に調整され、前面上縁部には両石材ともL字状の段差調整加工が施される。版築土は花崗岩風化土で、一層の厚さは3~7cm。検出部分は非常に堅緻にしまり、列石は完全に被覆される。横断面の土層は谷に向かって緩やかに下降する。

土塁前面には地山を削り出し、その上に薄い整地層をともなうテラス状の平坦面が形成されている。テラス部分の大半は流出しているが、わずかに痕跡をとどめる柱跡とその掘りかたが確認できた。柱は列石から離れて立つタイプのもので、略方形と推定される掘りかたに立てられる。掘りかたの埋土は一層の厚さ10~15cmで、版築状に堅く搦き固められており、上層部には石英礫が多量に混入する。柱の傾斜角は70度。土塁の傾斜は西壁が68度、東壁が63度。列石前面の傾きは西側80度、東側88度でバラつきがあるが西側の柱と土塁の傾斜はほぼ対応する。土塁の形状は内托式である。



第22図 A4トレンチ平面・立面・断面図 (1/40)

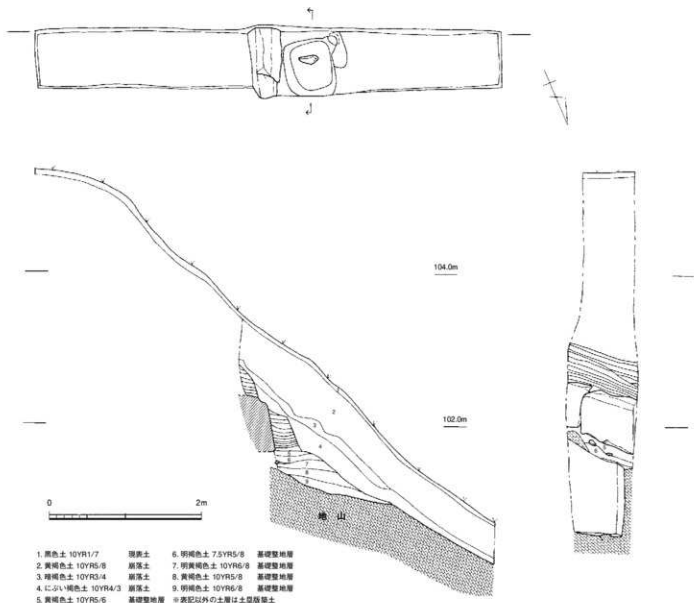
A5トレンチ (第18図・第23図・図版8)

東石塁のある谷の北東側で推定土塁線が谷部から東門のある尾根筋へと登っていく地点に設定したトレンチである。当初幅0.9m、長さ6mの長いトレンチを設定したが、実際地山まで掘削したのは列石より前面のみで、ここから列石と版築土塁、柱穴を検出した。

列石は2個検出され、どちらも前面を平滑に仕上げているが、下端部周辺は未調整である。南側の石材上縁部には段差調整加工が認められる。

列石は地形の傾斜に沿って並べられるが、石材自体を地形の傾斜に合わせて傾けながら連ねるのではなく、接合部で石を上下にずらしながら傾斜に沿わせている。したがって石材間の接合目地は垂直である。一方石材の上部と下部は地形の傾きに合わせて加工されているため石材の前面の形状は平行四辺形を呈する。東側の石材には石材間のずれを防ぐため鉤の手状の加工を施し、西側の石材に懸け安定を図っている。

版築土は砂質と粘質の花崗岩風化土で、一層の積み土の厚さは2～7cmで列石付近の土層は非常に堅くしめる。土塁の横断面の土層は地形に沿って傾斜し、一箇所斜め方向の区切りがみられる。土塁前面には地山を整形した上に数層の整地層からなるテラスが設けられ、そこから80×60cm、深さ12mの方形の柱穴掘りかたが検出された。柱跡は記録できなかったが、この掘りかたには2本分の柱跡が認められた。版築土は列石を完全に被覆する。列石前面の傾きは80度、土塁の傾斜角は67度である。



第23図 A5トレンチ平面・立面・断面図 (1/50)

A6トレンチ (第18図・24図・図版8・9)

A5トレンチの北東に位置する。A5トレンチと同様、土塁線が東門の尾根に向かって登っていく部分に設けたトレンチで、幅1m、長さ3.4mである。

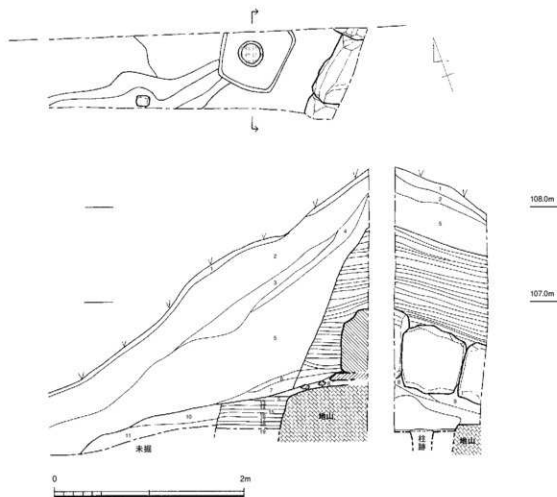
列石は3個検出され、前面は一応仕上げ調整されているが、わずかに凹凸が残る。

三つの石材の上縁部が揃うように前端部のみ面取り調整を施し、北側の石材には典型的な段差調整加工が認められる。石材の下縁部も揃っているが加工は粗雑である。

版築土は花崗岩風化土で積土の厚さは2～8cmである。土塁と平行する立面の版築土層は地形にあわせて17度の勾配で堆積している。列石の前面の整地層(第10層)には3～5cmの花崗岩の石屑が多く含まれる。列石を据えた後の仕上げ段階に生じた石屑を掻き込んだものであろう。土塁前面の整

地面からは一辺約60cmの不整形の掘りかたをともなう柱穴が検出された。掘りかたの埋土は層状を呈し版築状に積み固められている。柱の径は22cm前後で、位置的には版築土塁の外側に立つ柱である。

版築土は列石下端で約40cmの幅で列石を被覆する。列石前面の傾きは86度でほぼ垂直に立ち上がるのに対し、土塁の傾斜は68度と比較的ゆるい勾配である。



1. 黒褐色土 10YR2/2 珉黄土
2. 黄褐色土 10YR5/8 花崗岩風化土 粘質土壌 崩落土
3. 黄褐色土 10YR5/8 花崗岩風化土 黒褐色土壌 崩落土
4. 黄褐色土 10YR5/8 花崗岩風化土 粘質土壌 崩落土
5. 明黄褐色土 10YR6/8 花崗岩風化土 粘質土壌 崩落土
6. 明黄褐色土 10YR6/8 花崗岩風化土 粘質土壌 崩落土
7. 黄褐色土 10YR5/6 花崗岩風化土 粘質土壌 崩落土
8. しぶい黄褐色土 10YR6/4 風化花崗岩破砕土 基礎整地層

9. 黄褐色土 10YR5/6 花崗岩風化土 砂質土 基礎整地層
 10. しぶい黄褐色土 10YR6/6 花崗岩風化土 花崗岩石屑多 基礎整地層
 11. 明褐色土 7.5YR5/8 花崗岩風化土 粘質土 炭化物混 基礎整地層
 12. しぶい黄褐色土 10YR6/4 花崗岩風化土 砂質 掘りかた埋土
 13. 黄褐色土 10YR5/6 花崗岩風化土 粘質土 掘りかた埋土
 14. 黄褐色土 10YR5/6 花崗岩風化土 粘質土 掘りかた埋土
 15. 明黄褐色土 10YR6/8 花崗岩風化土 粘質土 掘りかた埋土
 16. 褐色土 10YR6/8 花崗岩風化土 粘質土 掘りかた埋土
 17. 明褐色土 7.5YR5/8 花崗岩風化土 砂質 掘りかた埋土
 18. 黄褐色土 7.5YR5/8 花崗岩風化土 砂質 掘りかた埋土
 19. 黄褐色土 10YR5/6 花崗岩風化土 粘質土 掘りかた埋土
- ※表記以外の土層は土壌隠蔽土

第24図 A6 トレンチ平面・立面・断面図 (1/40)

A7 トレンチ (第25図・巻頭図版6・図版10・11)

A7 トレンチは東門から土塁に沿って50mほど西に設けたトレンチである。ここでは土塁の前面から背面までトレンチを入れ、縦断面の状況を確認した。

現存する版築土塁の幅は基底部で7.2m、高さ4.8m。土塁の前面上部は崩壊するが土塁基底部から約1.6mまでは崩落土に覆われ、本来の土塁壁面の姿を良好にとどめている。土塁壁面の立ち上がりは75度に復元できる。

版築の積み土は花崗岩風化土を主体とし一層の厚さは3cmから厚いところで18cmである。粒子の粗い土と細かい土を交互に積み、基底部から高さ1mまでは砂質土を多用し特に堅くする。土塁前面では86層におよぶ積み土が確認された。

列石前面の基礎整地層には前後2列の柱穴が認められる。列石寄りの柱穴は径25cm、深さ約1.2mである。外側に位置する柱穴は径20cm前後、深さ30～40cmで柱間約1mである。

版築土は列石を被覆し、列石寄りの柱は版築の壁面より内側に立てられ、築地の須柱のように柱の大半が土塁に埋め込まれていたようである。版築工事の堰板はこの柱の後側に取り付けられたと考えられる。

外側の小型の柱は堰板の外側の支えと考えられるが検出したP3については掘込みが浅く、支柱としての安定性をやや欠くように見え、異なる用途を考えねばならないかもしれない。土塁の後端部より内側に約1.5mの地点で径20cmの柱穴が検出された。柱は版築下の地山(花崗岩風化土)に径40cmの円形の掘りかたを掘削し立てられる。A2 トレンチのP7と同様に前面の柱を後方から支えるための工事用支柱と考えられる。土塁の後端部にA2 トレンチのような石組みは認められない。地山より下部の版築層は内托式に地山に当てて処理しているが、地山より上部の版築層の押さえとなるものが確認されていない。後側の地山がもう少し高かったのか、検出できなかったが後側にも柱を立て堰板を用いたのか検討を要する。いずれにしても土塁背後の地形はおそらく意図的に削平されておりこの辺りから東門にいたるまで、通路状の空間が形成されていたと考えられる。

A8 トレンチ (第26図・図版12)

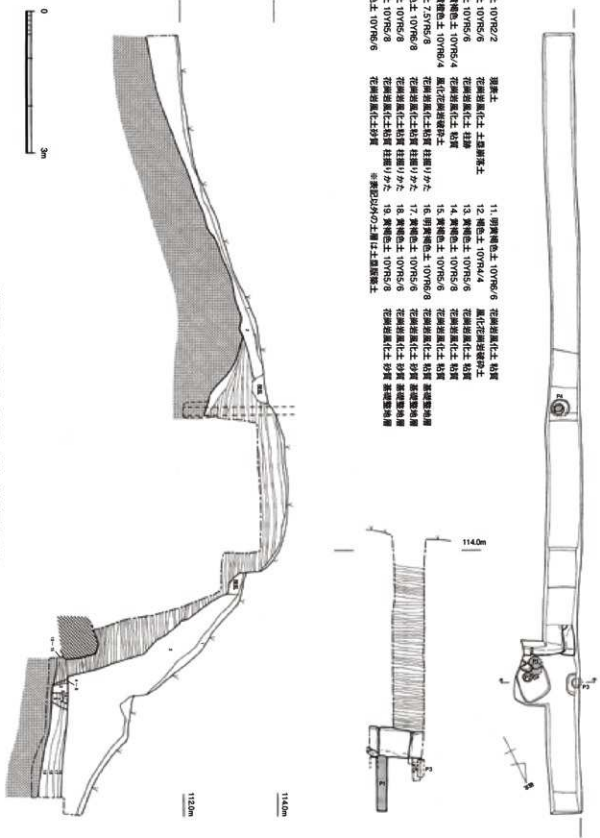
東門から第2東門にかけて築かれた外郭土塁上に設定したトレンチである。トレンチは幅約0.8m、長さ約4.5mである。列石は2個検出された。二つの石材は前面を平滑に仕上げ、上縁部が揃うように前面上端部のみ面取りされている。

版築土は花崗岩バイラン土を主体とし、積土の厚さは2～15cmである。列石上部から50cmくらいまでの土層は性質の異なる土を交互に積み、厚さも薄く緻密で非常に堅くするが、それより上層になると一層の厚さも厚く粘質土を多用ししまりもゆるい。

列石、版築ともに、地形にあわせて傾斜して築かれる。この部分の傾斜はかなりきつく、24度の勾配で積み土されている。土塁の縦断面の積み土は検出した範囲では水平に積み込まれている。

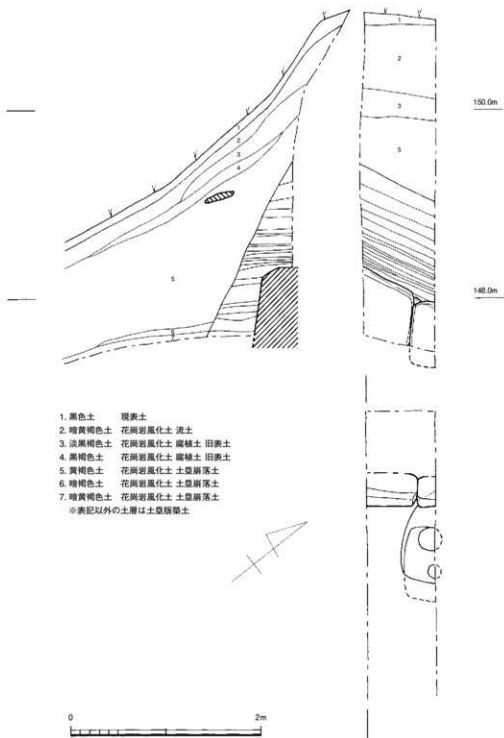
このトレンチは調査中に崩落したため、十分な調査ができなかったが、北壁側から不整形の掘りかたと同一掘りかたに立てられた2本の柱跡を検出した。柱跡は列石側の柱が径約23cm、外側柱が約12cmである。どちらの柱も土塁に向かって傾斜して立てられていたが、両者の傾きは必ずしも一致しなかった。

南壁における列石前面の傾斜は82度、土塁の傾斜角は65度である。



- | | | | |
|--------------------|-----------------|-------------------|-----------------|
| 1. 黒褐色土 10YR5/2 | 埋戻土 | 11. 明黄褐色土 10YR6/6 | 花崗岩風化土 粘質 |
| 2. 黄褐色土 10YR5/6 | 花崗岩風化土 土器割棄土 | 12. 褐色土 10YR4/4 | 風化花崗岩砂土 |
| 3. 黄褐色土 10YR5/6 | 花崗岩風化土 粘層 | 13. 黄褐色土 10YR5/6 | 花崗岩風化土 粘質 |
| 4. にごり黄褐色土 10YR5/4 | 花崗岩風化土 粘質 | 14. 黄褐色土 10YR5/6 | 花崗岩風化土 粘質 |
| 5. にごり黄褐色土 10YR6/4 | 風化花崗岩砂土 | 15. 黄褐色土 10YR5/6 | 花崗岩風化土 粘質 |
| 6. 明黄褐色土 7.5YR5/9 | 花崗岩風化土 粘質 住跡りかた | 16. 明黄褐色土 10YR6/6 | 花崗岩風化土 粘質 基礎敷地層 |
| 7. 明黄褐色土 10YR5/8 | 花崗岩風化土 粘質 住跡りかた | 17. 黄褐色土 10YR5/8 | 花崗岩風化土 砂質 基礎敷地層 |
| 8. 黄褐色土 10YR5/6 | 花崗岩風化土 粘質 住跡りかた | 18. 黄褐色土 10YR5/6 | 花崗岩風化土 砂質 基礎敷地層 |
| 9. 黄褐色土 10YR5/6 | 花崗岩風化土 粘質 住跡りかた | 19. 黄褐色土 10YR5/8 | 花崗岩風化土 砂質 基礎敷地層 |
| 10. 明黄褐色土 10YR6/6 | 花崗岩風化土 粘質 | | 花崗岩風化土 砂質 基礎敷地層 |
- ※黄褐色以外の土層は土器割棄土

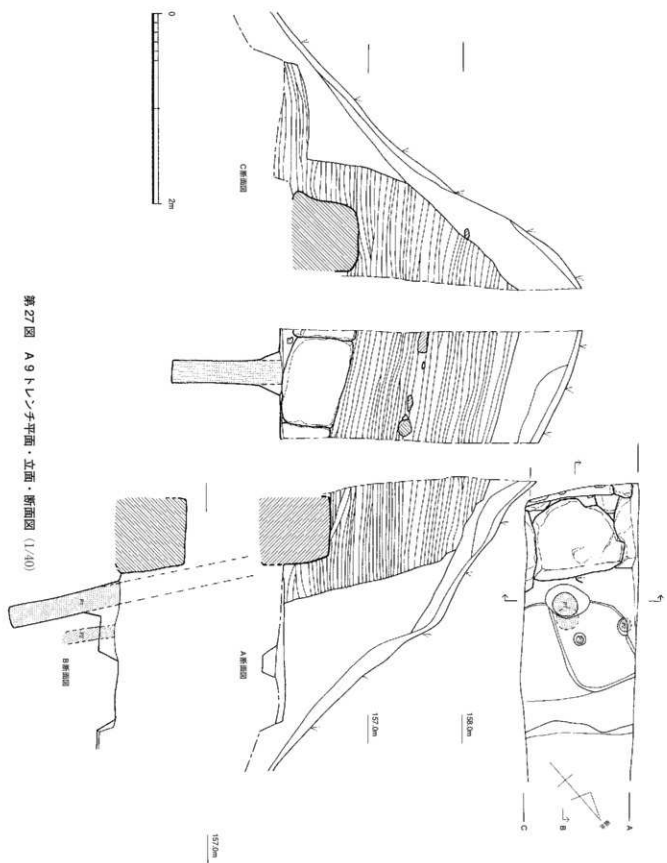
第25図 A7-1-1平台面・立面・断面図 (1/80)



第26図 A8トレンチ平面・立面・断面図 (1/40)

A9トレンチ (第27図・巻頭図版6・図版13・14)

A8トレンチから東に25mの外郭土壘線に設けたトレンチ。すぐ東側の土壘は長い区間にわたって大きく崩壊し基底部の列石のみ残存している。この部分の土壘も前面は崩落しており、その厚い流土を除去すると版築土壘が姿を現わす。



第27図 A9トレンチ平面・立面・断面図 (1/40)

列石は3個検出された。中央の列石石材は長さ94cm、高さ65cm、奥行き83cmを測る。いずれの石材も前面は平滑に仕上げられる。三つの石材は石材自体の高さを揃え段差調整加工はしていない。上縁部に対して下縁部の処理は粗雑で、東側の石材は前面の基礎整地層で覆われる部分は未調整でその部分は突起した状態で残存する。列石設置後テラスを造成し、その後列石の前面や上面の仕上げを行なったことが窺える。

版築土を掘削し列石の後背面まで検出し、列石の上面は平坦に整えられていることを確認した。しかし中央の石材と西側石材は側面、背面は荒削りの状態で方形に仕上げられていない。

版築土は花崗岩風化土を主体とし、検出した高さは約2.2mである。土塁上部の崩落土が土塁前面に厚く堆積し、これが下部の版築土塁を保護したようで、精緻な版築土層と土塁の立ち上がり状況を観察することができた。版築土の積土の厚さは2～8cm。列石上50cmくらいまでは花崗岩を砕いたような土を用い入念に築かれ、極めて堅緻な土層となっている。その30cm上に砂質土を二層積むが、それから上は粘質土のみ積み上げ、下層と比較するとしまりは良くない。

列石の前面を厚さ35～45cmの版築土が被覆する。列石も版築の土層も地形に沿って緩やかに傾斜している。土塁に対する縦断面の土層堆積状況は左右の壁面で微妙に異なるが原則的に水平に近い。ただし列石直上の数枚の土層は列石上面に擦り寄るようにして終わっており、堰板無しで行なう版築の初期工程を示すものと考えられる。

地山整形とその上に積まれた整地層によって形成されたテラスに不整形の掘りかたをとまう大小三つの柱穴を検出した。列石側のP1は径23cm、外側のP2、P3は径15cm前後である。P1は78度の角度で土塁側に傾き、ほぼ土塁に埋没する。P2の傾きは83度である。土塁前面の傾斜は76度、列石前面の傾斜は80度である。

A 12 トレンチ (第28図・図版15)

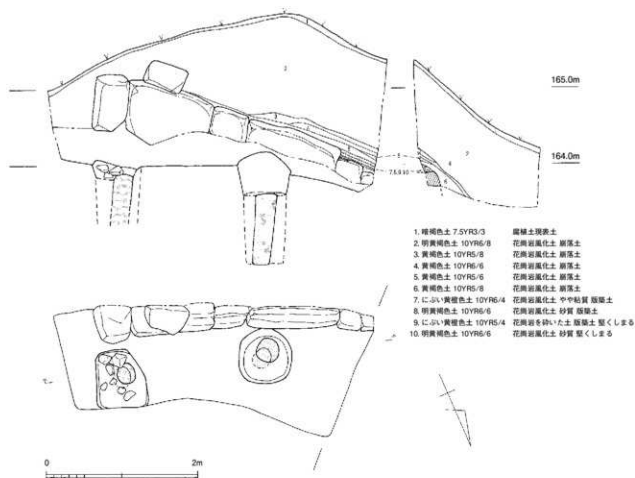
第2東門から東に続く土塁の前面に設置したトレンチである。土塁基底部に沿って東西約4.5m、南北約1.5mのトレンチを掘削し、6個の列石と2個の柱穴を検出した。土塁前面は崩壊が著しく、版築層はトレンチの西端で四層が観察されただけである。

トレンチの東側は特に崩壊が著しく列石も基礎整地層とともに流失してしまっている。西側には基礎整地層とともに層状に堅くしまる堆積土が列石の上位まで覆うが、これはおそらく列石前面の版築土であろう。

掘削は柱穴掘りかた検出面で止めたため列石の基部までは確認できなかったが、列石の長さは東から約40cm、110cm、45cm、125cm、33cmであり、長い石材と短い石材が交互に配置されている。列石の高さは55～70cmである。列石の前面は平滑に調整され、上縁部は一直線に並ぶよう揃えられているが下縁部は粗雑な加工である。列石は地形に沿って傾斜して配置され、横断面での列石線の傾斜は20度とかなり急勾配であるが、版築土もこれに合わせて積まれているようである。

柱は径約25cmで不整形と不整形の掘りかたに列石方向に傾けて立てられ、2本の柱の柱間は1.8mである。完掘した西側の柱穴は検出面から深さ1.3mを測る。

東側2石目の列石上には前面で幅50cmほどの石材があるが、南東石塁のように列石の上に石塁が存在したかは不明である。



第28図 A12トレンチ平面・立面・断面図 (1/50)

B1 トレンチ (第29図・巻頭図版7・図版16・17)

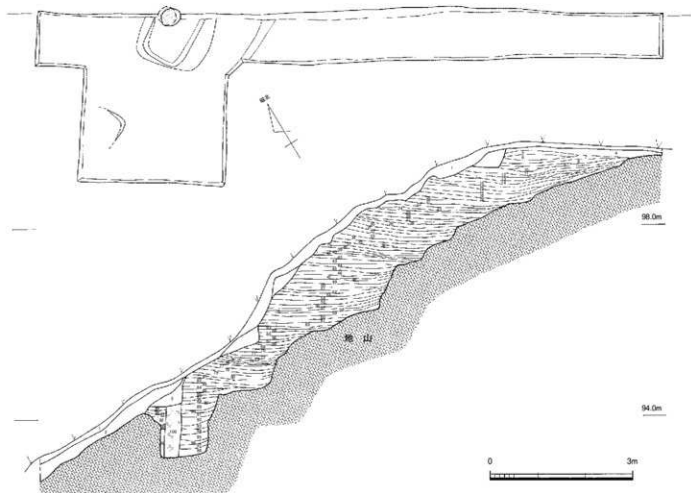
B1 トレンチは西門から土塁に沿って120mほど西に向かった地点である。ここでは土塁を断ち割るようなトレンチ掘削は行わず、土塁が崩壊した場所を調査地点に選び、崩落崖面を削って版築土塁断面の状況を観察した。このため断面は土塁に対して正確に直交するものではないが、現存幅7.6m、高さ4.5mほどの版築土塁と柱跡を確認した。

土塁後部の版築積み土はすべて山側の地山に当てる典型的な内托式土塁である。地山には版築工事にとまなう処置と考えられる段切りが認められる。

版築の積み土は花崗岩風化土で厚さは3cmから10cm。土塁断面で基底部から数えて82層の精緻な版築土層が観察された。

土塁の前面基底部には方形の掘りかたが掘られ、径約30cmでわずかに内傾する柱跡1本が検出された。掘りかたの埋土も土塁と同様に版築状に積み固められている。この柱は版築工事の支柱と考えられる。堰板の取り付け方について現時点では決め手はないが、列石を配置する土塁とは異なり支柱の内側に取り付けた可能性がある。本来の土塁壁面の傾斜は崩壊で判然としませんが、柱跡の傾きを壁面の傾斜と考えると85度でかなり急角度で立ち上がる土塁が復元できる。

この地点の土塁の特筆すべき点は神龍石の特徴である切石列石を欠くことである。土塁の前面基部の版築層の断面からも列石が欠落したのではなく当初より設置されていないことが明瞭である。



- | | | | |
|--------------------|-------------------|---------------------|--------------------------|
| 1. 黒色土 5Y2/1 | 腐植土 | 51. 褐色土 7.5YR6/8 | 非常に堅くしまる 土壌腐植土 |
| 2. 褐色土 7.5YR5/6 | 花崗岩風化土 | 52. 褐色土 7.5YR5/6 | 白色砕石粉土 土壌腐植土 |
| 3. 褐色土 7.5YR6/6 | 流土 | 53. 褐色土 2.5YR6/6 | 風化花崗岩質 土壌腐植土 |
| 4. 黄褐色土 10YR5/6 | 石灰質子実 土壌腐植土 | 54. 褐色土 5YR6/6 | 非常に堅くしまる 土壌腐植土 |
| 5. 褐色土 2.5YR6/6 | 白色砂子多 土壌腐植土 | 55. 褐色土 5YR6/6 | 白色砕石粉土 土壌腐植土 |
| 6. にい黄褐色土 5YR6/4 | 白色砂子多 土壌腐植土 | 56. 褐色土 5YR6/6 | 白色砕石粉土 土壌腐植土 |
| 7. 褐色土 2.5YR6/6 | 白色砂子多 土壌腐植土 | 57. 褐色土 5YR6/6 | 白色砕石粉土 土壌腐植土 |
| 8. 明赤褐色土 5YR5/8 | 石灰質多 土壌腐植土 | 58. 黄褐色土 7.5YR7/8 | 白色砕石粉土 土壌腐植土 |
| 9. 明赤褐色土 2.5YR6/8 | 石灰質多 土壌腐植土 | 59. 黄褐色土 7.5YR7/8 | 白色砕石粉土 土壌腐植土 |
| 10. 明赤褐色土 7.5YR5/6 | 非常に堅くしまる 土壌腐植土 | 60. 明赤褐色土 5YR5/8 | 風化花崗岩質砂土 土壌腐植土 |
| 11. 浅黄褐色土 7.5YR6/4 | 非常に堅くしまる 土壌腐植土 | 61. 褐色土 7.5YR6/8 | 風化花崗岩質砂土 土壌腐植土 |
| 12. 褐色土 2.5YR6/6 | 非常に堅くしまる 土壌腐植土 | 62. 明褐色土 7.5YR5/8 | 石灰質、カーボン少量 土壌腐植土 |
| 13. 黄褐色土 7.5YR6/8 | 石灰質多 土壌腐植土 | 63. 明褐色土 7.5YR5/6 | 石灰質、カーボン少量 土壌腐植土 |
| 14. 褐色土 7.5YR6/8 | 石灰質多 土壌腐植土 | 64. 明褐色土 7.5YR5/8 | 花崗岩細粒多 土壌腐植土 |
| 15. 褐色土 5YR6/8 | 花崗岩質多 土壌腐植土 | 65. 褐色土 7.5YR6/6 | 石灰質多 土壌腐植土 |
| 16. 褐色土 5YR6/6 | 花崗岩質多 土壌腐植土 | 66. 明褐色土 7.5YR5/8 | 石灰質、カーボン少量 土壌腐植土 |
| 17. 褐色土 5YR6/6 | 非常に堅くしまる 土壌腐植土 | 67. 褐色土 5YR6/8 | 非常に堅くしまる 土壌腐植土 |
| 18. 褐色土 5YR6/6 | 赤褐色土粉多 土壌腐植土 | 68. 明褐色土 7.5YR5/8 | カーボン少量 土壌腐植土 |
| 19. 褐色土 2.5YR6/6 | 花崗岩風化土 土壌腐植土 | 69. 褐色土 5YR6/8 | 花崗岩細粒多 土壌腐植土 |
| 20. 褐色土 5YR6/6 | 石灰質少 土壌腐植土 | 70. 褐色土 7.5YR6/8 | 石灰質少量 土壌腐植土 |
| 21. 褐色土 2.5YR6/6 | 白色砂、カーボン少量 土壌腐植土 | 71. 褐色土 5YR6/6 | 花崗岩風化土主体とする 土壌腐植土 |
| 22. 褐色土 2.5YR6/6 | 白色砂、カーボン少量 土壌腐植土 | 72. にい黄褐色土 10YR6/4 | 堅くしまる 土壌腐植土 |
| 23. 赤褐色土 10R6/8 | 白色砂、カーボン少量 土壌腐植土 | 73. 褐色土 7.5YR6/6 | 花崗岩風化土主体とする 堅くしまる 土壌腐植土 |
| 24. 赤褐色土 10R6/6 | 白色砂、カーボン少量 土壌腐植土 | 74. 明褐色土 7.5YR5/6 | 花崗岩風化土多 土壌腐植土 |
| 25. 褐色土 2.5YR6/8 | 白色砂、カーボン少量 土壌腐植土 | 75. 褐色土 5YR6/8 | 花崗岩風化土多 土壌腐植土 |
| 26. 褐色土 2.5YR6/6 | 黄褐色土 土壌腐植土 | 76. 明赤褐色土 5YR5/8 | 石灰質少量 土壌腐植土 |
| 27. 褐色土 5YR6/8 | 白色土、赤褐色土 土壌腐植土 | 77. 明赤褐色土 5YR6/6 | 花崗岩細粒多 土壌腐植土 |
| 28. 褐色土 5YR6/6 | 白色土、赤褐色土、流土 土壌腐植土 | 78. 明褐色土 7.5YR5/6 | 石灰質多 土壌腐植土 |
| 29. 褐色土 2.5YR6/6 | 白色土粉多 土壌腐植土 | 79. 褐色土 5YR6/8 | 花崗岩風化土多 土壌腐植土 |
| 30. 褐色土 5YR6/6 | 風化花崗岩質砂土 多 土壌腐植土 | 80. 明褐色土 7.5YR5/8 | 石灰質多 土壌腐植土 |
| 31. 褐色土 2.5YR7/8 | 風化花崗岩質砂土 多 土壌腐植土 | 81. 明赤褐色土 5YR5/8 | 風化花崗岩質 土壌腐植土 |
| 32. 褐色土 2.5YR6/6 | 白色土粉多 土壌腐植土 | 82. にい黄褐色土 10YR5/4 | 石灰質多 土壌腐植土 |
| 33. にい黄褐色土 5YR7/4 | 花崗岩ブロッコワ泥 土壌腐植土 | 83. 褐色土 7.5YR6/8 | 花崗岩風化土多 土壌腐植土 |
| 34. 黄褐色土 10YR7/8 | 黄褐色土 土壌腐植土 | 84. にい黄褐色土 7.5YR7/4 | 花崗岩細粒多 土壌腐植土 |
| 35. 黄褐色土 5YR8/4 | 風化花崗岩質 土壌腐植土 | 85. にい黄褐色土 10YR6/4 | 花崗岩細粒多 土壌腐植土 |
| 36. 明赤褐色土 5YR8/8 | 風化花崗岩質砂土 土壌腐植土 | 86. 褐色土 5YR6/6 | 花崗岩細粒多 土壌腐植土 |
| 37. 浅黄褐色土 2.5YR7/3 | 風化花崗岩質砂土 土壌腐植土 | 87. 明赤褐色土 5YR5/8 | 風化花崗岩質砂土、しまり不良 土壌腐植土 |
| 38. 浅黄褐色土 2.5YR7/4 | 白色薄層多 土壌腐植土 | 88. 明赤褐色土 5YR6/6 | 風化花崗岩質砂土、しまり不良 土壌腐植土 |
| 39. 褐色土 2.5YR7/8 | 風化花崗岩質砂土 多 土壌腐植土 | 89. 褐色土 7.5YR6/8 | 風化花崗岩質砂土、しまり不良、盛りかた埋土 |
| 40. 褐色土 2.5YR6/8 | 風化花崗岩質砂土 土壌腐植土 | 90. 明褐色土 7.5YR5/6 | 石灰質多、しまり不良、盛りかた埋土 |
| 41. 褐色土 2.5YR7/8 | 褐色土 土壌腐植土 | 91. 明褐色土 7.5YR5/8 | 石灰質多、しまり不良、盛りかた埋土 |
| 42. 褐色土 5YR6/8 | カーボン泥 土壌腐植土 | 92. 褐色土 7.5YR6/8 | 花崗岩風化土主体とする 盛りかた埋土 |
| 43. 褐色土 5YR6/6 | 非常に堅くしまる 土壌腐植土 | 93. 褐色土 7.5YR6/8 | 石灰質少量、盛りかた埋土 |
| 44. 褐色土 5YR6/6 | 褐色土 土壌腐植土 | 94. にい黄褐色土 5YR6/4 | 花崗岩風化土主体とする、しまり不良、盛りかた埋土 |
| 45. 褐色土 2.5YR7/8 | 白色砕石多 土壌腐植土 | 95. 褐色土 5YR6/6 | 粘質土、しまり不良、盛りかた埋土 |
| 46. 黄褐色土 7.5YR7/8 | 非常に堅くしまる 土壌腐植土 | 96. にい黄褐色土 10YR6/4 | 花崗岩風化土主体とする、盛りかた埋土 |
| 47. 黄褐色土 7.5YR7/8 | 褐色土、腐植土 | 97. 明褐色土 7.5YR5/8 | 石灰質多、しまり不良、盛りかた埋土 |
| 48. 黄褐色土 7.5YR7/8 | 石灰質少 土壌腐植土 | 98. 明褐色土 7.5YR5/6 | 花崗岩風化土、褐色土 粘層 |
| 49. 褐色土 7.5YR7/6 | 白色砕石粉多 土壌腐植土 | 99. 明赤褐色土 5YR5/8 | しまり不良 |
| 50. 褐色土 7.5YR7/6 | 褐色土 土壌腐植土 | 100. 明赤褐色土 5YR5/6 | しまり不良 |

第29図 B1トレンチ平面・断面図 (1/80)

(3) 外郭線の石塁

東石塁 (第30図・図版45)

中門と東門を結ぶ外郭線の中間に位置する小さな谷に築かれた石塁。明治42年(1909)喜田貞吉、宮崎栄雅、伊東尾四郎らが御所ヶ谷を踏査した際の記録⁵⁾に「沢谷と覺しき辺に至りて、水門型の遺蹟を発見したり」とあるのがこの石塁のことと思われる。

この石塁は未調査であるが、現在露出する石塁部分の長さは約7mで東寄りの部分が一部崩れている。石塁は横長方形の切石の石材を整層積み(布積み)する。なかには鍵形に加工して組み合わせた石材も認められる。石材のサイズは一定しないが、大きいもので長さ1m、高さ35cmである。石積みは少なくとも五段以上積み、石材はやや小ぶりであるが形態や加工、石積みの手法は中門石塁に類似する。石塁の高さは1.5mであるが更に地下に埋没している可能性もある。石塁上には土塁が築かれる。排水口の有無は不明でありこれらの確認が今後の調査の課題である。

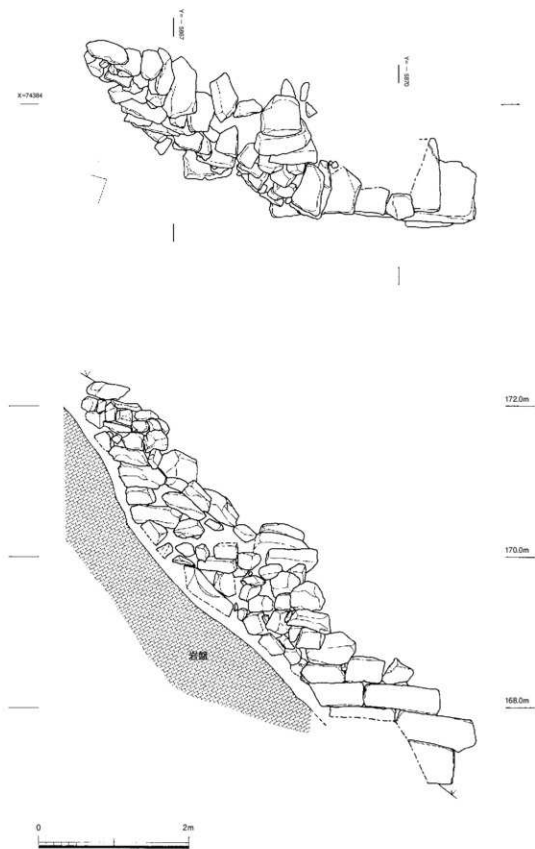


第30図 東石塁

南東石塁 (第31図・図版45)

第2東門の東約20mに残る石塁遺構である。

平成5年度、外郭線伐採作業の際に発見され、神籠石の南東部に位置することから「南東石塁」と名付けた。第2東門の25mほど東には巨大な花崗岩の岩盤がそびえるが、石塁はこの岩盤に取りつくように築かれている。石塁西端からA12トレンチまでの間は地滑りで遺構は失われており、現在残っている石塁の長さは東西約5mである。石塁自体も崩落が著しく築造時の石塁の高さは不明であるが、少なくとも3m以上あったと推定される。石塁の西側基底部は丁寧に加工された直方体の切石を整層積み(布積み)で4段積み上げている(下から4段目はやや加工が粗雑)。石材間には鍵形の加工も見られ、岩盤と接する部分では石材を岩盤の形に合わせて加工し密着させるなど、その手法は中門の石積みと近似する。主要な切石のサイズは幅1m前後、高さ30~50cm。東石塁の石材よりはやや大きな印象を受ける。切石石材の上には長さ20~70cmの割石を野面積みしている。また東側では切石は置かず岩盤に直接野面積みしている。平面プランを見ると、切石が終わるあたりで石積みは約28度南に折れていることがわかる。



第31圖 南東石壘 平面・立面圖 (1/50)

(4) 小結

1. 外郭線の分類

これまで確認されている御所ヶ谷神籠石の外郭防衛線は版築土塁と石塁と人為的な防衛施設が存在しない部分の3種で構成されておりこれらの外郭線に必要な応じて城門が設けられている。

①版築土塁

御所ヶ谷神籠石の外郭線の主流をなすものは版築土塁でありその延長は約2kmにおよぶ。

外郭線の版築土塁は土塁基底部の列石の有無により2分類される。

基底部に列石を持つ土塁は中門の西30m地点から南東石塁までの480mと西側の外郭線にある「見張」と呼ばれる巨石付近から南門の東200m地点までの940mを合わせた1420mである。

列石を設置しないと推定される土塁は、中門の西30m地点から「見張」付近までの約600mである。列石非設置の土塁については前述したB1トレンチの他に西門の西側でさらに1地点(B2地点)、西門の東側でも1地点確認している。現時点では城内列石線の外側に張出す土塁線は列石非設置と判断しているが、これを確定するためには西側の勝山町域の外郭線も含む詳細なトレンチ調査が必要である。

土塁の横断面形状からは土塁背面にも壁をもつ夾築式土塁と後側の版築土をすべて山の斜面に当てて後ろ側には壁を持たない内托式土塁の二種が存在する。

大部分の土塁は内托式であるが城門付近では一定距離、夾築式に築造する傾向がみられる。夾築部分の背面構造はA2トレンチにみられるような石積みをとまうことが多いと推測される。こうした夾築式土塁も山の斜面を利用して築かれるため、版築の大部分は山に寄せて施工され、土塁上部のみ夾築工法で築く。したがって土塁の後側の壁体は前面に比べ著しく低い。

②石塁

外郭線は基本的に土塁で石塁の部分は極めて限定される。これまで城門部以外で石塁が確認されているのは東石塁と南東石塁の2箇所のみである。

東石塁は外郭線が小規模な谷を横断する部分に築かれている。したがって水対策のため土塁の下部構造を石塁としたものと考えられ、通水溝などの確認が今後必要であろう。

一方、谷ではなく後線上にある南東石塁が土塁ではなく石塁とされたのは降雨の際、岩盤を流下する水が塁線を浸食することへの対策と考えられる。

これらの石塁以外に谷部に築かれた中門と西門の城門に石塁がともなう。谷を流れる水対策と城内への主要路であることから、防衛と同時に城郭としての威容を示す目的も兼ねていたであろう。他の城門は門道に面した壁のみ石組とし城門の両側まで石塁を構築したものは確認されていない。

③塁線未確認部分

防衛工作物が確認されていない約1kmについては、列石や土塁の滑落の痕跡等の確認や堀切や木柵等の工作物の確認作業が今後も必要であろう。そうした工作物がない部分も、それが天然の要害を考慮した当初からの計画だったのか、未完成に終わった結果であったのか検討を要するところである。

2. 土塁の築造方法

これまでの調査から土塁の築造工程は以下のように推定される。

①工事予定地の整備

工事予定地の草木を伐採。作業道の確保など。

②地山整形

表土を削り土塁版築土を受ける山側は必要に応じて段切りを行う。列石配置予定地や前面の作業面はテラス状に整形する。この際生じた土を版築用に分類して集積する。

③基礎整地（第1工程）

地山が不安定な場所や十分なテラス面が確保できない場合基礎整地を行う。列石設置箇所に基礎整地を行う場合もある。（これらの作業に堰板などが用いられたかは未確認）

④列石の配置

切り出して運び込まれた列石を整形し所定の場所に設置する。その際列石相互が密着するように石の側面は特に入念に調整する。

⑤列石の調整

列石の前面が揃い石面に凹凸が無いよう敲打などにより調整する。ただし基礎整地層に隠れる部分は調整しない。列石の上縁のラインが揃うようにL字型や弧状の段差調整加工を施す。

最終加工の際に生じた石屑が基礎整地層に巻き込まれる場合がある。また土塁版築の下層部分にも花崗岩を破碎したような土が多用されておりこれらの石屑を利用した可能性もある。

⑥基礎整地（第2工程）

列石配置後にさらに前面に数層の整地を行う場合がある。

⑦最も外側の柱を立てる

列石前面の整地面に掘りかたを掘削し柱を立てる。A2トレンチのP6、A3トレンチの外側の掘りかた、C地区トレンチの柱群がこれに相当する。これらの柱がどのような工程で必要とされたのかはまだ不明である。

⑧版築（第1工程）

列石後背面の版築を列石の高さ前後まで行う。（この工程では列石が堰板の機能を果たす。）

⑨列石寄りの支柱とその外側の柱を立てる

掘りかたを掘削し支柱を立てる。同一掘りかたに2本の柱が立てられる場合もある。

⑩土塁後方の柱を立てる。

地山に掘りかたを掘削し柱を立てる。

⑪版築（第2工程）

前面の支柱に堰板を取り付け版築工事を行う。

⑫背面の石組を積む

土塁の版築と並行して、あるいは版築作業終了後に背面の版築を一部削って石積みを行う。

⑬支柱の撤去

不要になった支柱を切断し取り除く。

⑭姫垣の構築

須柱状に土塁に埋まって残された内側の支柱を利用し土塁上に姫垣を構築する。

第3節 城内列石線の調査

(1) 分布調査 (図版18・19)

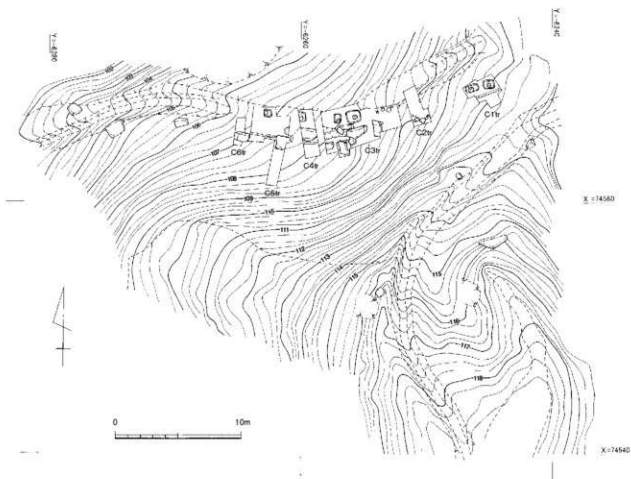
城内に列石が点在することは定村責二らの踏査で発見され、それ以降御所ヶ谷神龍石は墨線が二重構造であると認識されていた。

外郭線の調査が一段落した平成7年度(第3次調査)から城内列石線の確認調査を開始した。

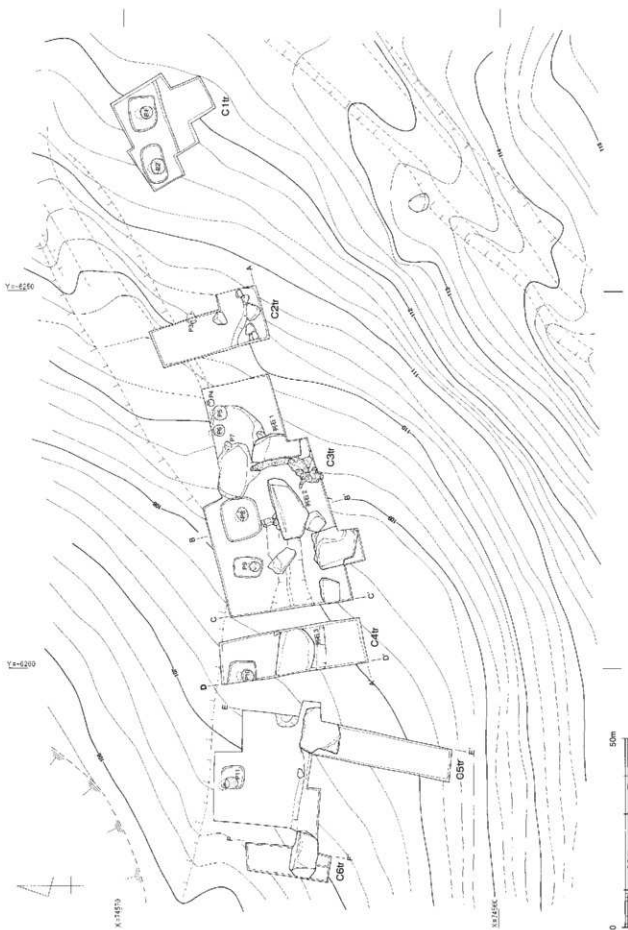
まず定村が城門を想定した西門南方150mの谷の西側に点在する列石状石材の分布調査を伐採作業を行いながら実施した。その結果、尾根の北側を削平したテラス状の地形と点在する列石状石材が確認された。列石の上に土塁状の地形は認められず、崩壊流失したとも考えられない状況である。

列石状石材は一定の区間連続した列を成す場合もあれば一石単独で存在するものもある。また段差調整加工を施した明らかな列石石材が設置位置から離れて放置された状態のものも散見される。

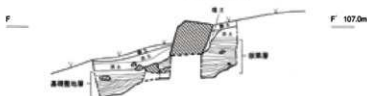
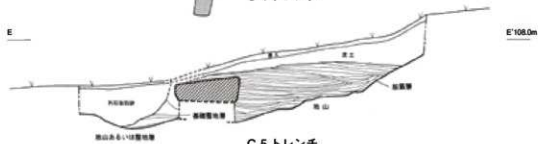
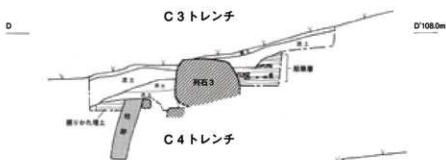
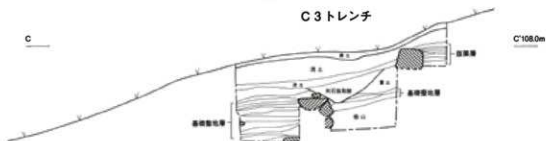
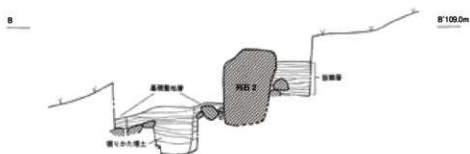
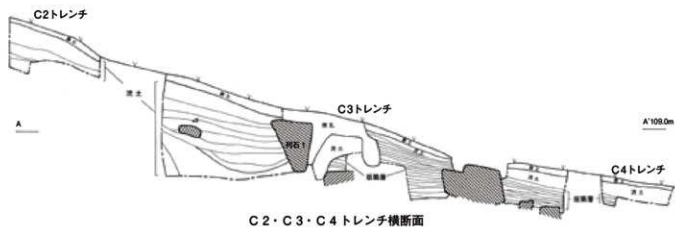
谷の東側から景行神社の尾根に向かう斜面にも西側と同じようにテラス状平坦面とそこに点在する列石が確認された。(第32図)この地点の列石も断続的であり長い区間にわたって連続する状況は認められなかった。



第32図 C地区トレンチ周辺地形図 (1/300)



第33図 C地区トレンチ平面図 (1/100)



第34図 C2～C6地区トレンチ断面図 (1/60)

定村が作成した遺構分布図の城内の列石線は西外郭線の手前で南に折れ、尾根伝いに南外郭線に向かっていているが、南に向かう尾根ではまだ列石等は確認できていない。さらに詳細な分布調査が必要であるが、現時点で城内の列石線は中門の西40m地点から西外郭線の「見張」と呼ばれる巨石のやや北側までの東西330mにわたると推定している。(第16図・付図)

(2) 発掘調査 (図版20～24)

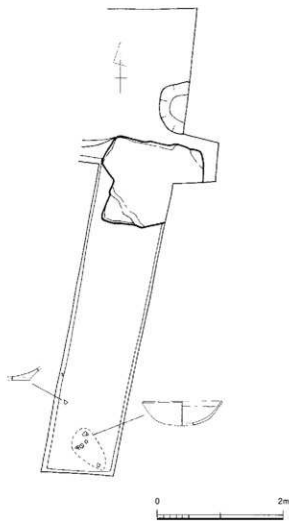
城内列石線の実態をより具体的に把握するため景行神社のある尾根の西側斜面に分布する列石群についてトレンチ調査を実施した。(第33図)

調査にあたって城内列石推定線をC地区とし東側からトレンチ番号を付した。

調査対象地は尾根を削平して形成された平坦地に列石状石材が点在する状態であった。約20mの調査対象区間にC1～C6まで6本のトレンチを掘削し、版築土塁、列石等の石材、柱穴群などを検出した。

調査区には複数の石材が点在するが列石と考えられる石材は3個のみである。列石1は若干動いているが列石2、列石3は原位置を保っている。列石1は前面幅70cm、高さ70cm。列石2は前面幅160cm、高さ120cm。列石3は前面幅130cm前後、高さ70cmである。これら3個以外の列石は抜き取られ運び去られている。C3トレンチやC5トレンチでは列石抜き取り跡と考えられる落ち込みも確認されている。列石の後側にあたる位置からも大小の石材が検出されている。これらの石材は列石の裏込めや土塁の基礎として設置されたものであろう。列石の前面には層状に積み固められた基礎整地層が形成されそこから柱穴群が検出された。これらの柱穴は径30cm前後の太い柱と径15cm前後の細い柱に分けられ方形の掘りかたに立てられる。いずれの柱も列石の方向に傾けて立てられ、検出面からの深さは1m前後である。トレンチ調査であるため明確ではないが、柱間は約1.5m間隔と3m間隔で検出されるものがあり後者の間にさらに1本の柱穴を想定すれば1.5m程度の柱間と考えられる。いずれにしても柱の間隔にあまり厳密な規則性はないようである。柱と列石の間隔はP8が67cm、P10が55cmである。

列石の後背面にはほぼ列石の高さまで版築土塁が築かれ、版築工事の第1工程までが行われていた



第35図 C5トレンチ遺物出土状況図 (1/60)

ことがわかる。1層の厚さ2～7cmの緻密な版築層で極めて強固に搦き固められており、こうした点はA地区の土塁の第1工程と同様である。列石の背後に置かれた石材はこの版築層に被覆されており、原位置を保持していることがわかる。

版築の積み土はほぼ列石の高さにとどまっております堰板を利用して積み土を行なう段階まで工事は進捗していないと判断され、これらの柱が堰板の固定に用いられたとは考えにくい状況である。(第34図) 前述のようにA2トレンチ、A3トレンチでも一連の版築工事に用いられた柱に先行する柱穴や掘りかたが検出されており、これらと同様の目的で立てられたと思われるが、具体的な用途の解明は今後の課題といえる。

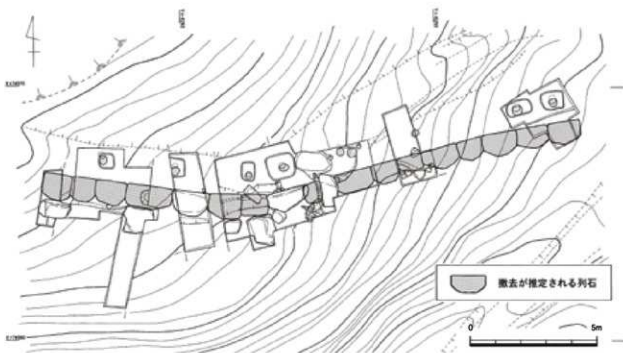
出土遺物については後述するが、C5トレンチの土塁版築土層上に堆積した流土から二種の土師器碎片が出土している。そのほかトレンチ埋土から弥生土器も出土している。(第35図・第52図)

この地区の列石が連続しないのは当初から設置されていなかったのではなく一度設置されたものが抜き取られたものと理解される。1個の石材の幅を120cmと仮定するとこの区間から15個の石材が撤去移動されたことになる。(第36図)

これら城内の列石材の移動先については、西門と中央丘陵の礎石建物跡にL字状の段差調整加工が施された石材が認められることから、これらの築造に用いられたとみられる。今回トレンチ調査した区間の石材は距離的に近い中央丘陵の建物の礎石として転用された可能性が高い。

一方で移動されずに残された石材があるのはどうしてであろうか。この点はさらに検証する必要があるが、石材の形状やサイズの面から利用し難いと判断された石材が残されたのかもしれない。

城内の未完成の土塁と西門に連なる北側の外郭線との前後関係であるが、城内土塁の列石石材が西門に転用されていること。(図版31-3) 工事が途中で中断しているものの、城内土塁の築造工法は基本的に中門に連なる東側土塁線と一致することから、城内の土塁線が当初計画された外郭線であり、北側の列石非使用の外郭土塁線が計画変更後の外郭線と考えることができる。



第36図 列石配置推定図 (1/150)

第4節 城門の調査

御所ヶ谷神籠石には現在までに7箇所の城門跡が確認されている。これらのうち古くから城門として認識されていたのは中門、西門、東門で、その後第2東門、南門が定村貢二により、第2西門と第2南門が向井一雄により発見された。

中門、東門、西門は古くは「中御門」「東御門」「西御門」と呼ばれ、景行天皇の行宮に関連する遺構と考えられていた。東西の門の呼称も「中御門」を基点にして東にあるものを「東御門」、西にあるものを「西御門」と単純に呼んだもので、必ずしもその方位に位置する門ではなく西門は北門と呼んだ方が適切である⁽⁴⁾。また中門も社寺などの門と誤解されるおそれもあるため、概報作成時に他の城門も含めて正しい方位あるいは山籠の集落名に基づいた名称への変更を考えた。しかし江戸時代からの歴史的名称で既に定着していたこともあり、新発見の他の城門の名称も含めてこれまで使われてきた呼称を踏襲することとした。

平成5年度からこれらのうち中門、東門、第2東門について測量や発掘調査を実施した。それぞれまだ確認調査の段階であるがここまでの調査内容を報告しておく。

(1) 中門 (第37図～第39図・巻頭図版3・図版25～29)

発掘調査はまだ実施していないが、平成5年度に(株)パスコに委託して西側石塁の平面、立面、断面図及び東側石塁の一部立面図を作成した。あわせて教育委員会で周辺の平板地形測量を実施したのでそれに基づく知見を記していきたい。

立地と防御プラン

中門は御所ヶ谷神籠石を象徴する遺構でその規模の大きさと独特な形状で古くから周知されてきた。長く草木に覆われていたが平成5年度の写真測量の際に伐採と清掃を行なったところ、7世紀の土木技術の粋を結集して築かれた雄姿を再び現した。

山の北側斜面を城域とし水の流れを絶やすことない二つの大きな谷を抱くが、このうち東側の谷に設けられたのが中門である。

中門の北麓約1.6kmには古代の駅路が東西一直線に貫いている。城の南麓にも伝路の存在が推定されているが、地形的にも交通面でも北側が御所ヶ谷神籠石の防御正面であるといえる。

現在も神籠石を訪れる人の多くはこの中門を通して城域に入る。防御正面を向くことや手の込んだ城門のつくりからも7つある城門の中でも最も重要な門の一つであることは間違いない。

石塁は谷を遮るように構築され、その東寄りの部分に城への通路が設けられている。幅6mの門道部も含めた城門の石塁全体の長さは約26mである。城門から東西に続く土塁は意図的に北側に張り出して築かれるため、左右の土塁に立てば城門を眼下に見下ろすことができ、攻め寄せる敵を土塁上から弓矢などで効果的に攻撃できる構造となっている。とくに西側の土塁は登城路に沿って約150m北に張り出しており、この区間、攻城軍は西の土塁上からの弓矢の射程に晒されることになる。城門西側の石塁は前面が二段に築かれ、現況で東西の長さ約18m、上段の石塁幅約9m。下段は東側で約2.5m、西側で約4m前方に張り出す。石塁の高さは下段が約2.5m、上段が4.6～5.3mである。上段石塁は地形に沿って西側ほど高くなるが、最も高い地点と石塁最下部との比高差は11.7mである。上段の石

塁は、アーチダムのように緩やかに弧を描く平面プランを呈している。

通水溝

西側石塁には現在は機能していないが1本の暗渠式通水溝を設けている。取水口は半ば埋れているが、背面の石塁の東端近くで確認されている。前面石塁の下段中位に設けられる排水口は取水口の位置より西に偏っており、通水溝は石塁に対し直交しないことがわかる。排水口は幅50cm、高さ50cmの正方形で、凹字状石樋を石塁から突出させる国内の古代山城では他に例をみない独特の形状である。

石積みの特徴

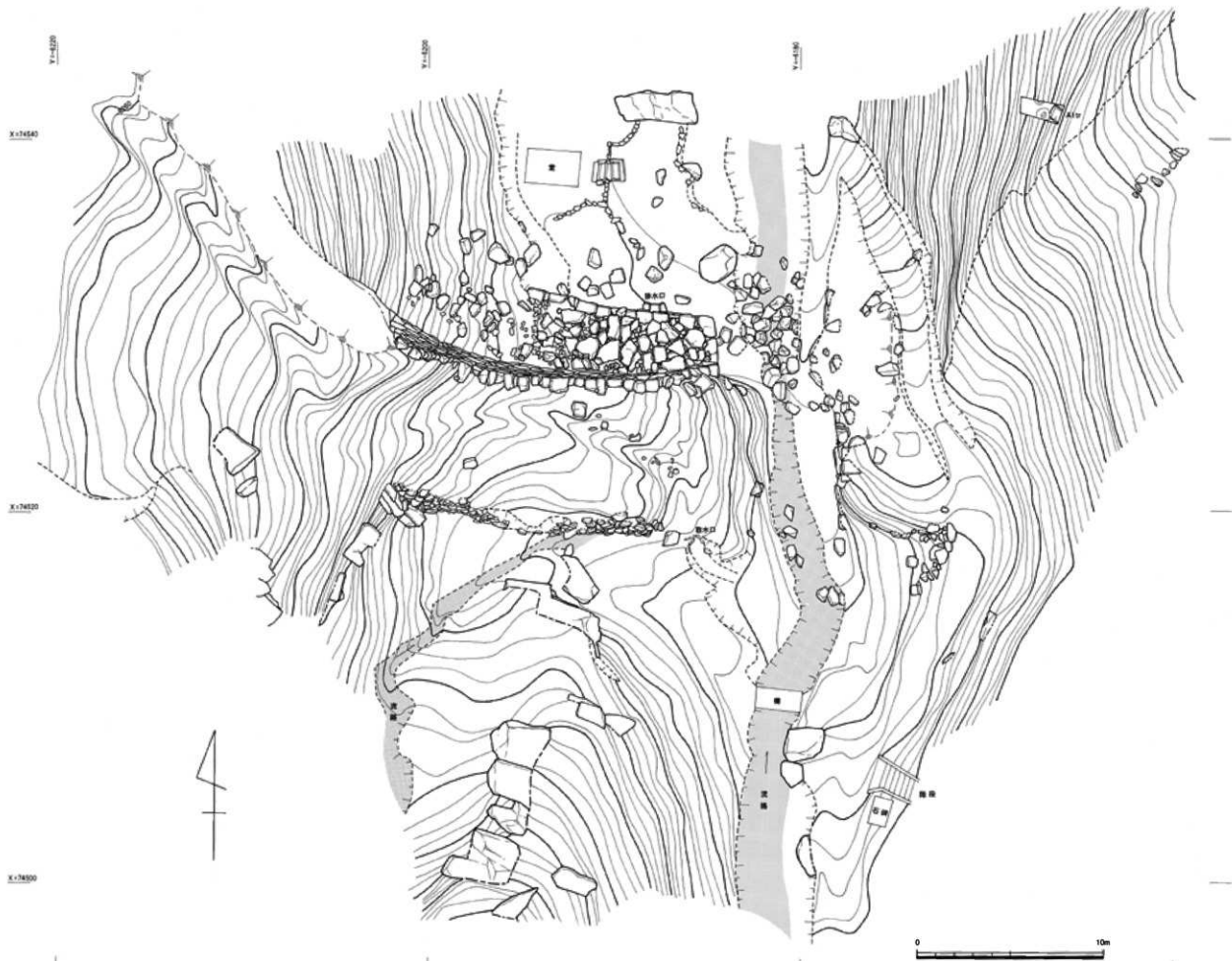
中門の立地する場所は谷自体が深く城の内外で比高差が4mほどあることから、前面に高い石塁を必要とする。この高い石塁の安定性を確保するため二段に築成したと考えられる。

詳細は発掘調査を待たねばならないが上段の石塁の芯部は版築土と思われる。下段の石塁は上面に平らな石材を敷きつめ、崩落部分を観察する限り芯部も石築である可能性が高い。

石積みは横長の切石を横目地を揃えて積み上げる整層積み（布積み）を基本とし、石材の角を鍵形に落として組み合わせる手法も随所に認められ、いたって精緻な石積みである。西端の石材は露頭した岩盤の形状にあわせて加工しこれに密着させ、岩盤自体も石塁の面にあわせて前面をカットして城壁の一部として利用している。石積みの主体は上記のように布積みであるが、上段石塁の上部には西門や東門にみられる重箱積みが目立つ。こうした石積みの相違は当初石塁崩落部分の積み直しによるものと考えていたが、精緻な布積みが短期間で崩れ、重箱積みの補修部分が今日まで残ったとは理解し難く、築造上で石積みの手法が布積みから重箱積みに変更されたと解釈するのがより合理的であろう。石塁の背面は1mに満たない荒削した石材を野面積みにした粗雑な作りである。城外から見えない部分であり視覚的配慮の必要性が少ないことと地形上高い石塁を必要としないことから簡易な石積みにしたものと考えられる。前面の切石積みの石塁はほぼ垂直（84度）に積まれるのに対し背面の石積みは緩傾斜（64度）で積まれている。門道をはさんで東側の石塁は崩落が著しく築城当初の姿が不明瞭である。写真測量は門道に面した石積みのみ実施し、北側正面や南の背面は行っていない。平面プランは西側石塁の上段に対応し幅6m、奥行9mの門道部を構成するが、城外側は東に折れ土塁に連なるようである。その下部に南北方向に伸びる石列も認められ複雑な構造となっている。門道に面した石積みは西側の石塁と同じく布積みを基本とするが上部にはやはり重箱積みの手法が認められる。西側石塁の裏手には花崗岩の露頭が見られ、節理面に沿って石を切り出した状況が認められる。石塁用石材はまずこうした手近な場所から入手したのであろう。

城門の建物

発掘調査を行っていないため、城門部の構造は全く不明といわねばならない。現在通水溝は機能しておらず谷の水は門道部を溪流となって流れ、そこに崩落した石塁の石材が折り重なっている。溪流脇の現在の通路も崩落土の上形成されており、門礎の有無等は確認できない。おそらく当時の門道床面は現通路よりかなり低い位置にあったと考えられる。推測の域を出ないが、東側石塁のあり方などからみて城門の構造物は西の上段石塁と東側石塁の間の幅6m、奥行9mの範囲に建っていたのではないだろうか。

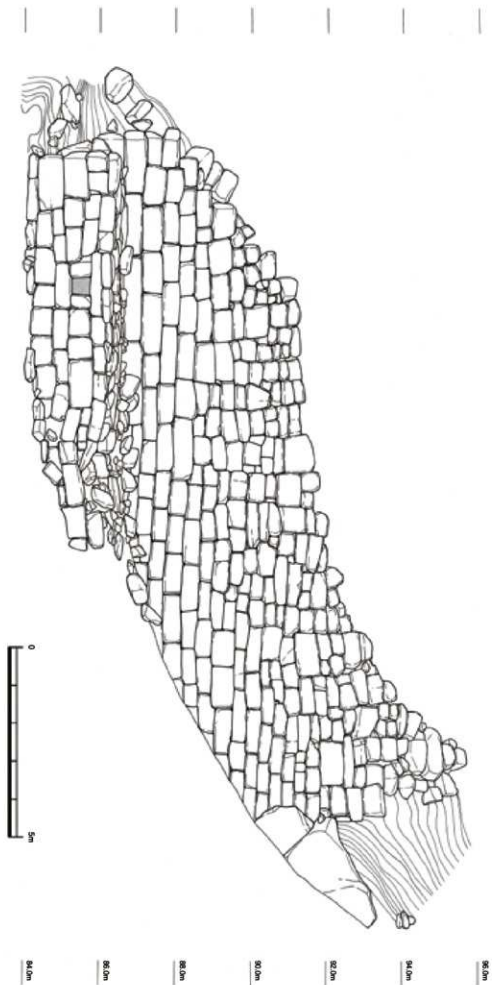


第 37 圖 中門周辺地形測量圖 (1/200)

第38圖 中門石壁平面・立面・断面圖(1/200)



第39圖 中門面佛石壁立面圖 (1/100)



立地と調査経過

東門石塁は平成14年度から平成15年度にかけて発掘調査を実施した。東門も「東御門」と呼ばれ江戸時代以前から周知されてきた遺構である。中門の東約140m、標高約120mの尾根上に築かれ東に向いて開く城門である。現在東門に至るルートは中門北側の駐車場から急斜面を登るルートとそれよりやや下った住吉池のほとりから尾根伝いに登る二つのルートがあり（付図）、両者は東門の約100m北の尾根上で合流する。現在は駐車場がある前者のルートがよく使われるが、当時は傾斜のゆるやかな後者が登城路として用いられたのではないだろうか。

調査前は、門道北側壁面の石積みが5～6段地表に見えるだけで南側の壁面とそれに続く土塁は崩壊、埋没あるいは流出し、地表に痕跡をとどめてなかった。（図版32）城門の規模と構造を確認するために門道部を中心に発掘調査を実施した。

調査の結果、東門は予想以上に埋没が著しいことがわかった。門道の床面を確認するため北側を壁面に沿って掘り下げたが、石積みが不安定であることから作業の安全面と遺構の保護を考慮し、完掘は将来の調査に委ねた。これに替え基底部の高さを把握するために崩壊の危険性の少ない北壁の前面にトレンチを掘削し、土塁基底部の列石に連なる最下段の石材を検出した。

規模と構造

最下段石材から残存する北壁最上部まで高さは4.5mである。現在地表に現れている部分が約2.2mなので、概ね半分の高さまで埋没していることがわかる。基底部で検出された列石から推定すると、東門から北側の土塁に沿う通路も2m近く土砂に覆われていることになる。意外に思えるが、これまで調査してきた土塁の高さが4.5～4.8m（A2・A7・B1 トレンチ）であることからするとこれも肯かるところである。

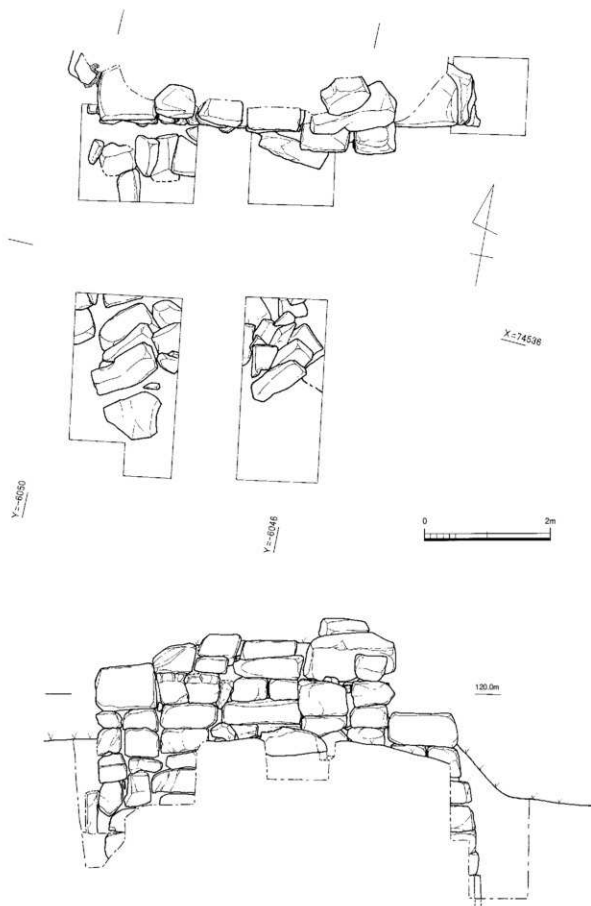
門道の幅を確認するため南側壁の推定地を掘り下げたが崩落石材に阻まれ完掘にはいたらなかった。石材の崩れ方の状況から幅4m前後と推定される。

北壁の石積みは重箱積みである。壁面西端に顕著に現れるが、小型の石材を縦二列に重箱積みし、その上に二石分的大型石材を重ねる手法がみられる。西門や中門石塁の上の方にも用いられる手法である。東門では著しく小さい石材を下部に多用しており、極めて不安定な印象を抱かざるを得ない。前面袖部も石材をひたすら上へと一列に積み上げただけで、裏込めのな石も認められない（図版35）。このような石積みで高さ4m以上の壁面を形成したために、南側の石積みは山側からの土圧で土塁とともに比較的簡単に崩壊したであろうと推定される。一方北壁は南側の土塁の崩落土砂で下半分が埋没したことが幸いし、今日までその姿をとどめたのかもしれない。

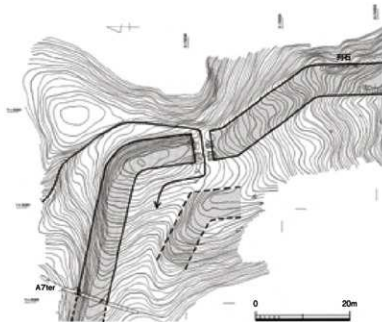
城門北側の土塁にトレンチを掘削した。列石のある基底部まで掘り下げることは断念したが、工事前の支柱跡1本分を検出した。（図版36）

城門部の防御プラン

尾根筋を登って来た進入路をクランクさせ城門に導く東門の縄張りについてはすでに指摘されている⁵⁾が測量調査に基づき東門の縄張りデザインを復元してみたものが第42図である。登城者は高さ約5mの聳え立つ城壁を見上げながら城門へと至る。土塁に沿って進むこの間、土塁上からの攻撃にさらされることになる。城門の南側は土塁が東側に張り出しているため、南に向かって進むことは困



第41図 東門平面・立面図 (1/60)



第42図 東門周辺縄張り概念図 (1/800)

難であろう。城門を入ると正面に土塁状の高まりがある。これは尾根を削り出したもので、現在は1mほどの高さすぎないが、門道の埋没状況から築造当時は3m以上の比高差があったと考えられ、城門防御に重要な役割を果たしたものと推定される。東門一帯の縄張りはこのような戦術的思考を取り入れて設計されており、我国の古代山城の城門構造としては一定の進化を遂げた段階のものと位置づけられよう。

(3) 第2東門 (第43図～第48図・巻頭図版4・図版37～44)

調査経過

第2東門は東門の南東約200m、標高162mの尾根上に築かれた城門である。この門は昭和46年(1971)に定村貢二らによって発見された⁶⁾。

平成5年度に外郭線調査の一環として一部トレンチ調査を実施し、平成10年度から平成14年度にかけて発掘調査を行った。調査前の第2東門は北西側の城門部が左右の土塁線からやや窪んでいる以外は袖部の石材数石のほか若干の石材らしきものが散見されるに過ぎなかった。

平成5年度、城門の北西壁の前面にA10トレンチを設定し、6段分の石積みとその前面に堰板の支柱と考えられる柱跡とその掘りかたを検出した。その際、トレンチ断面の土塁崩壊層から須恵器長頸壺の口縁から頸部にかけての破片が出土している。

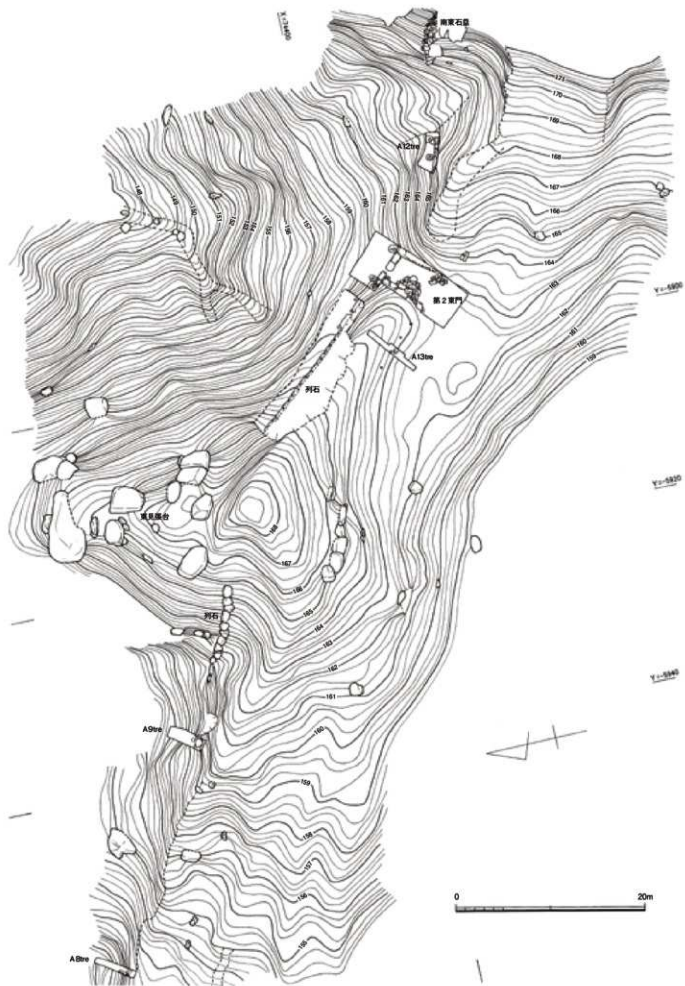
平成10年度からの発掘調査では門道部の掘り下げから着手した。

この門も東門と同様門道の両側壁は石積みであるが、どちらの壁も予想以上に崩壊が著しく崩れ落ちた石材が門道部に累積した状態であった。石材の崩落状況を記録しながら撤去作業を行なったがナンバーをつけて撤去した石材は211個にのぼった。南東の壁側は床面まで検出できたが、北西壁は崩落石材の撤去が土塁の崩落を招くおそれがあったため完掘しなかった。

城門の構造

第2東門の門道の規模は、幅が前面で3.3m、後側が3.5m。門道の長さは5.5m(最後尾の石が外側に屈曲した部分まで含めると5.8m)である。壁面の高さは前面床面から現況の石積みの最も高い部分までで3.4mを測る。門道の床面には層状の整地層がみられる。城門は尾根斜面上に築かれているので、城の内外の比高差が大きい。このため門道部を整地し傾斜を緩やかにしている。しかし城門に入った正面には急傾斜の地山を意図的に残し城内への侵入を阻む構造となっている。

第2東門では城門の建物跡は確認できなかった。門礎等が検出されなかったため、南東壁に沿って



第 43 図 第 2 東門周辺地形測量図 (1/400)

掘立柱の柱穴を捜したがこれもついに検出できなかった。瓦など建物の存在を示唆するような遺物も出土していない。

あえて建物の存在を想定するのであれば、木製の礎盤などの利用を考えなければならない。

門建物が無い場合はこの城門が未完成と考えるか、当初から門建物は計画されていなかったのか検討する必要がある。当初から門建物が計画されていない場合、恒常的な遮蔽構造物を設けないということであり、それに代わるバリケードのような臨時的な遮蔽物を設置する用意があったのであろうか。門建物の有無や構造についてはさらに詳細な調査が必要である。

石積みの技法

築造時の姿をとどめる石積みはわずかであったが、これらの石組や崩落した石材の状況から第2東門の門道側壁に重箱積みが多用されていたことがわかった。北西壁最後尾の石積みなどは地山に寄せ掛けながら上に行くほど大きな石を積んでいる。(図版40-2)

このように重箱積みを基調としながらも南東壁の二段目までは布積みである。二段目の石材はやや小ぶりであるが横長の石材を縦目地をずらして積み、石材の天端は水平に揃えている。(第44図)一部鍵形に切り欠いた接合面も認められ、この部分には中門や東石畳の石積みと同様の技法が見てとれる。このように第2東門にも中門と同じく布積みと重箱積みが混在することがわかった。



第44図 南東壁の石積み

城門の構築方法

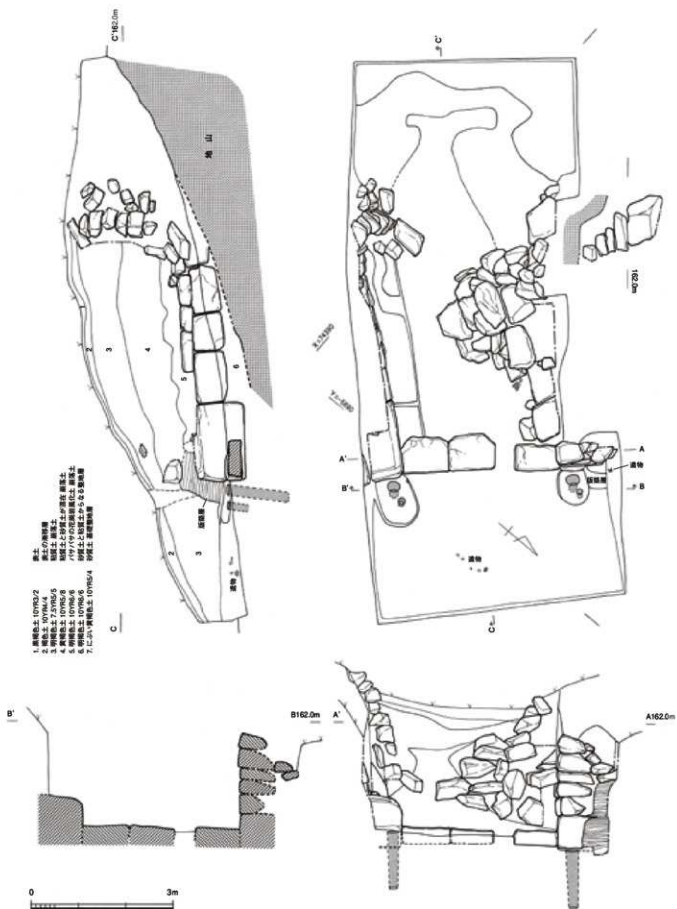
南東壁前面の基礎石に、門道壁には不必要な段差調整加工が施されていること。北西壁の基礎石よりも南東壁の基礎石が約40cm高く、山の傾斜に沿った土塁を断ち切って城門を敷設したように見えることから、第2東門が当初からあった城門なのか、新設された門であるのかを検討課題となった。

土塁を断ち切って城門が新設されたのであれば門道部から土塁築造時の支柱穴が検出されるはずだがこれが検出されないこと。南東壁の基礎石が通常の列石より大きな石材(高さ約1m、奥行1.6m)が意図的に用いられていることなどから城門が新設されたものとは考え難い。城門を構築する際、城門部分で列石を90度折り曲げたような形にしたため、あたかも土塁を断ち切ったように見えるのであろう。

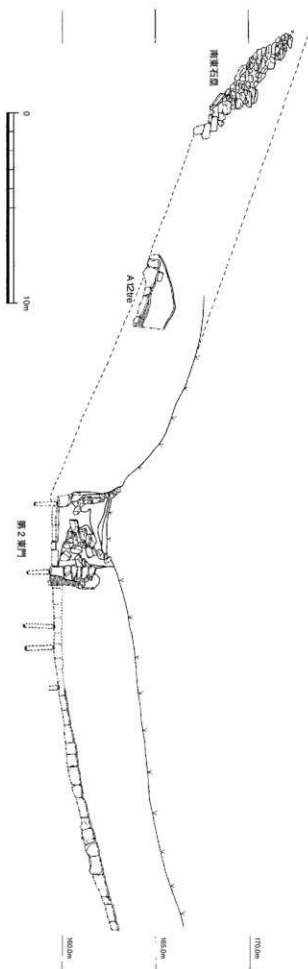
城門の両袖部から検出される柱穴は版築土塁の支柱と考えられることから、城門の袖部まで堰板を用いた版築工法で土塁が築かれていたことになる。問題は門道の壁側の構築方法である。壁沿いの床面に柱穴が検出されないことから版築と側壁の積み上げを平行して行ない石の側壁自体に堰板の役割を担わせたのであろうか。これについてはさらに詳細な検討が必要である。

城門の縄張りと同周辺の状況

第2東門への登城ルートは他の城門と比較して不明瞭である。城門前面の谷筋と考えるのが最も自然だがこの谷筋を下っても東門への登城口とさほど離れない位置に下りる。人員、物資を東麓から城内に入れる場合も東門があれば十分に第2東門の存在意義は薄いように感じられる。攻める側にとっても、標高が高く攻めやすい城門とはいえない。明確な城門建物が見あたらないのもこの城門への侵



第45図 第2東門平面・立面・断面図 (1/80)



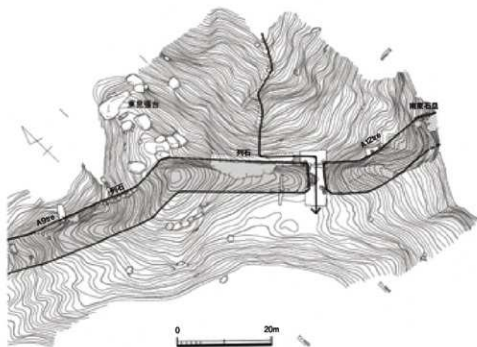
第46圖 第2東門周辺土壁石壁立面圖 (1/200)

攻をあまり想定していなかったのかもしれない。とはいえ労力を費やして石積み の門道壁まで築かれており、この場所に城門を設けた理由は考えなければならない課題であろう。

第2東門の前面の谷部は土砂の流出などで地形が変容している可能性が高く登城ルート を特定しにくい が、東門にみられるような動線を考えると城門のやや北西の土塁前面に登らせ、土塁沿いに進み左に折れて城門に入るルート(第47図)が考えられる。ただし現状では土塁前面は崩落し、ここに通路があったのかは不明であり、谷筋を城門に直登した可能性も否定できない。

第2東門の北西30mに通称東見張台と呼ばれる花崗岩の巨石が露頭する眺望良好な尾根の突出部がある。外郭線防御のセオリーでは、この尾根を外郭線に取り込み雄城(敵に側面から攻撃を掛けるため城壁に設ける突出部)として用いれば城門に寄せる敵に横矢を掛けるのに極めて有効であるが、この張出しを雄城として用いたかはまだ確認されていない。御所ヶ谷神籠石の外郭線は城門部などに先進的なブランがみられるが雄といえるような構造は未確認である。今後外郭線をさらに詳細に調査していくなかで雄に相当するような建造物の有無を意識的に確認していくことが必要であろう。東見張台の突出部も今後外郭線の防御構想のなかでどのように取り扱われたのか検討していく必要がある。

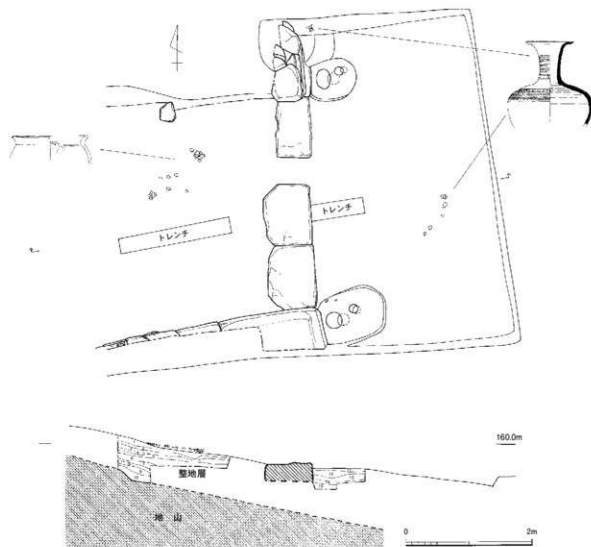
第2東門の北西に連なる列石前面からは柱穴列が検出されている。ほかの部分と同じく土塁に埋設される支柱と外側に立てられる柱穴がある。土塁の後ろ寄りの部分からも、柱間180~195cmで横一列に並ぶ4本の柱穴を検出した。版築土塁下の地山に掘り込まれた掘りかたに立てられたもので、A2トレンチやA7トレンチで確認されたものと同じく、前面支柱を後方から支えるための柱であろう。



第47図 第2東門周辺縄張り概念図(1/800)

出土遺物 (第48・52・53図・巻頭図版8・図版52)

出土遺物のうちこの城門の築造時期を示唆するにもに須恵器長頸壺片と土師器甕口縁部片がある。須恵器長頸壺片は第1次調査で北西壁の前面崩落土中より口縁部から頸部にかけてが出土し、第9次調査では門道前の床面から胴部片が出土し、これらが接合した。7世紀第3四半期頃のものと考えられ、門道床面から出土した土師器甕片もほぼ同時期のものと考えられる。これらの土器の出土からこの城門が7世紀の第3四半期頃には築造されていた可能性が高い。



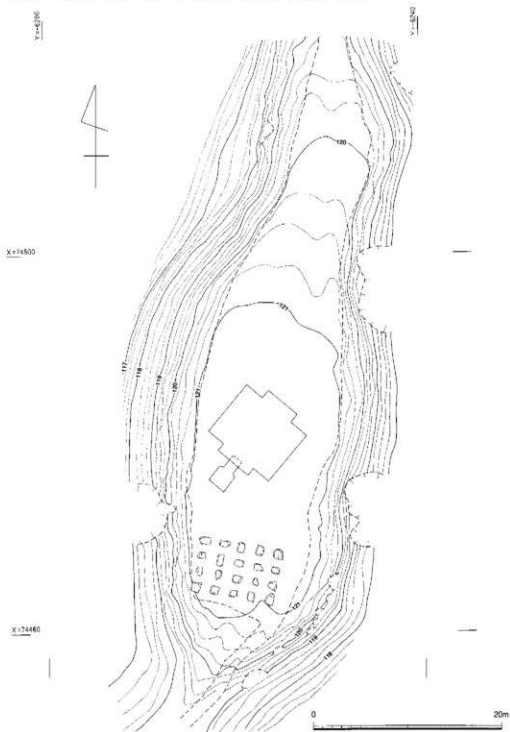
1.10YR6/8 明黄褐色土 粘質土と砂質土の混層	整地層	8.10YR6-6 明黄褐色土 粘質土	整地層
2.10YR6/6 明黄褐色土 粘質土と砂質土の混層	整地層	10.10YR5-6 黄褐色土 粘質土 地山の可能性あり	整地層?
3.10YR6/4 にごい黄褐色土 砂質土	整地層	11.2.5Y7/2 灰黄色土 花崗岩の粉末のような土	整地層
4.10YR5-6 黄褐色土 砂質土	整地層	12.10YR7/4 にごい黄褐色土 花崗岩を砕いたような土	整地層
5.10YR6/6 明黄褐色土 砂質土	整地層	13.10YR6-6 明黄褐色土 花崗岩を砕いたような土	整地層
6.10YR5-8 黄褐色土 粘質土と砂質土の混層	整地層	14.10YR5/4 にごい黄褐色土 砂質土	整地層
7.10YR5-6 黄褐色土 粘質土と砂質土の混層	整地層	15.10YR6/4 にごい黄褐色土 砂質土	整地層
8.10YR6/4 にごい黄褐色土 粘質土	整地層		

第48図 第2東門床断面および遺物出土状況図 (1/60)

立地

城内のほぼ中央に南から北へと伸びる標高121mの丘陵上に位置する。江戸時代、元禄年間にはすでに景行天皇の行宮跡として知られていた礎石である。

測量とトレンチ調査は平成8年度と9年度に行なった。礎石があるのは尾根を削平して形成された南北約80m、広いところで東西約15mの平坦地の最も南側である。この削平地の先端に立てば北と東の平野が眼下に広がる。また城壁の巡る四方の尾根を見渡すことができ、旗などを使えばここに居ながらにして城内の各所と連絡ができる戦闘指揮には格好の場所である。



第49図 景行神社周辺地形測量図 (1/400)

規模と構造

建物は梁行3間、桁行4間、東西棟の総柱礎石建物である。20個の礎石すべてが現存し、中央に景行天皇を祀る石祠が建てられている。建物の規模は芯々で南北4.95m、東西7.90m。柱間の平均は梁行165.0cm、桁行197.5cm。1尺を33cmと想定すると5尺と6尺。30cmと想定すると5.5尺と6.5尺となる。礎石はすべて花崗岩。上面は平坦で柱座は認められない。L字状の段差調整加工を施す明らかな神籠石の列石石材が複数認められるが、それ以外の礎石も列石を転用している可能性が高い。基壇はともなわず地山に礎石より一回り大きな掘りかたを掘削し設置する。底まで完掘していないが、根石は配されてないようである。地盤が花崗岩風化土でしっかりしているため丘陵が雨水で削られつつある南西部以外では礎石の沈下や傾斜は認められない。

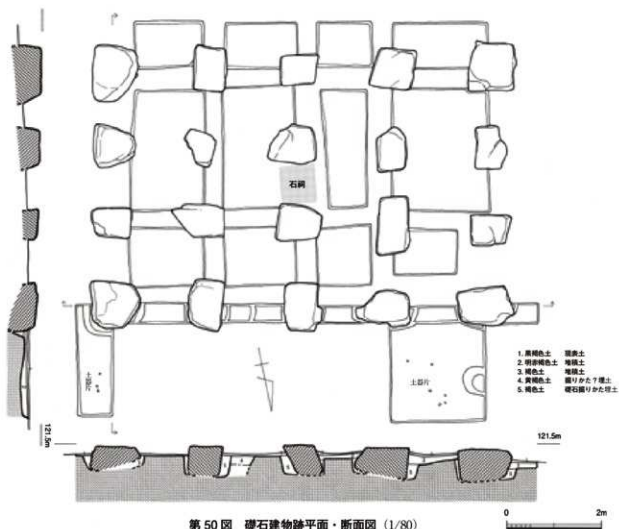
周辺からは土師器や須恵器片が出土するが瓦は確認されていない。

築造時期と建物の種類

この建物は列石の転用材が使用されていることから中世の山城にともなうものとされてきた。

しかし周辺に郭、堀切など中世城郭にみられる遺構を見出せず、元禄年間にはすでに景行天皇の行宮跡と伝承されていることから中世山城の存在を裏付ける根拠には乏しい。また列石の転用については西門にも同様の転用材が認められることから、この礎石建物跡も西門築造時期まで遡る可能性を有していることになる。

築造時期が明確でない以上、この建物の役割を特定することは今のところできない。



第50図 礎石建物跡平面・断面図 (1/80)

仮に古代山城にともなう建物であるとすれば立地的に倉庫とは考え難い。前述したようにこの丘陵は城の中央に位置し眺望も良く、各部所との連絡も容易であることから戦時には司令塔の機能を果たしたと思われる、そこに建つこの建物も自ずとそうした立地条件に応じた施設だと考えるのがより適当であろう。いずれにしても今はまだ結論付ける段階ではなく、御所ヶ谷神籠石がさらに総合的に調査されていくなかでこの建物跡の時期と役割も明らかになっていくものと考えられる。

景行天皇の石祠

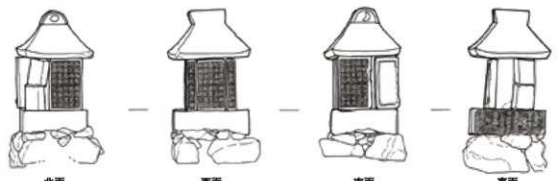
礎石の調査と合わせて礎石の中央に建つ石祠の実測と銘文の採拓を行なった。

花崗岩で作られた石祠は東面して建てられ、台石の正面に建立年月日と関係者の名前、石祠の三面に漢詩が刻まれる。漢詩の撰文は山麓、上稗田村に著名な私塾水哉園を開いた村上剛（仏山）である。この石祠については古賀武夫の『村上仏山を巡る人々』（1990）に詳しい。銘文後半の文意を同書より引用すれば次の通りである。

「山水靈秀この地は景行天皇の長峽県（長門）の行宮の跡であるから、古来樹木を伐ったり、耕作するものもなく、御殿の礎石が、昔のまゝ残っているのは天皇の遺徳のしからしむるところである。この度、勝地を下して神祠を建てる。今後は春秋の祭典を永久に怠らぬようにしなければならない」

この石祠は江戸時代より御所ヶ谷の遺跡に寄せられた地域の人々の想いをあらためて感じさせられる遺構である。

勅	神	乃	石	行	山	西	誅	所	皇	熊	萬	乃	踐	於	山	同	津	久	四	惟
銘	降	祭	礎	宮	水	州	彼	向	帝	夷	邦	建	昨	昭	口	村	村	保	天	
不	景	卜	尚	之	靈	平	無	無	無	不	率	有	何	皇	嘉	壯	世	仁	月	
朽	福	祭	高	故	秀	定	赫	赫	怒	庭	服	極	時	帝	久	八	治	庄	五	
以	通	勿	存	不	長	有	與	仁	西	自	籬	儀	世	日	藏	話	兵	屋	甲	
告	爾	惟	厥	推	峽	有	靡	義	面	以	厥	刑	屬	月	正	入	屋	立	午	
悠	非	愛	可	加	所	了	有	之	征	如	為	玄	鴻	争	之	衛	直	五	日	
遠	願	建	見		跡	遺	遺	師	之	強	黃	邦	荒			治		歲	歲	



第51図 石祠の拓本と実測図 (1/40)

第6節 出土遺物 (第52・53図・巻頭図版8・図版51・52)

一般に神籠石式山城からの出土遺物は少なく、本遺跡もその例にもれずこれまでの調査で出土した遺物は必ずしも多くはない。出土遺物の中には山城築城以前の弥生土器等も含まれるが、築城の年代を示唆する土器も出土している。

1はA5トレンチの列石前面の埋土より出土した弥生土器(あるいは土師器)の甕等の胴部片。外面にタテハケ目、内面はナデ調整を施す。

2は城内列石線に設けたC5トレンチより出土した土師器の坏。この土器は第1期工事の土壘版築層の上に堆積した埋土の中より出土した。接合した土器片は第35図に示すようにややバラバラな状態で出土している。口径12.2cm、器高3.9cmに復元できる。内外面ともに赤褐色を呈し、胎土にごくわずかに砂粒を含む。内面はナデ、外面は手持ちヘラ削りの後ナデ調整。全体的に薄手なつくりである。

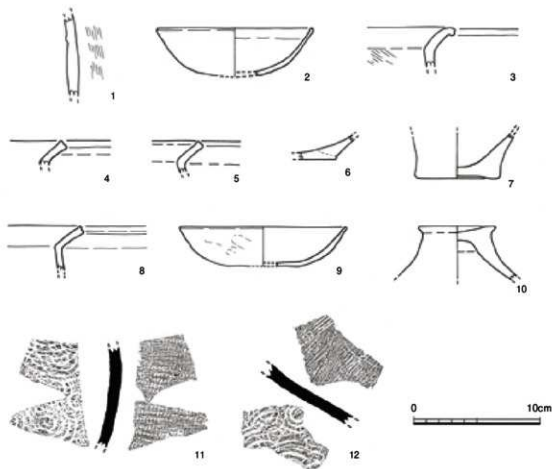
3はC地区の表採品で弥生土器あるいは土師器甕の口縁部。内面にハケ目が見られる。焼成はやや不良、明黄褐色を呈す。

4はC3トレンチの埋土中より出土した弥生土器の甕の口縁部。淡黄色を呈す。

5はC3トレンチ埋土中より出土した弥生土器の甕口縁部。橙色を呈し焼成は良好。

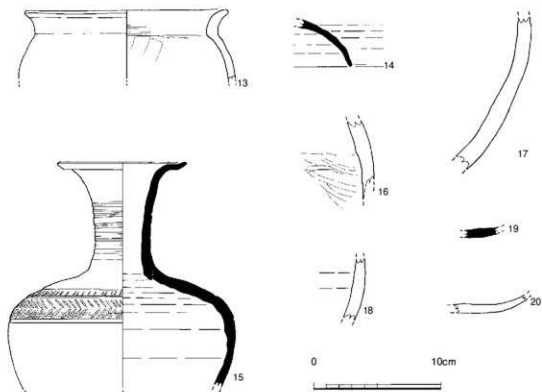
6はC5トレンチより出土した土師器の皿の底部。第35図に示したように2の坏片と近接する同一層から出土した。底面はヘラ切り後ナデ調整。胎土にはわずかに砂粒が含まれる。焼成は良好で内外面とも橙色を呈す。

7はC3トレンチの埋土中より出土した弥生土器の甕の底部。底径6.8cmで胎土に砂粒を多く含む。外面は明赤褐色、内面は黄橙色を呈し焼成は良好。



第52図 出土遺物実測図① (1/3)

8は中門の西側石塁背面を清掃中に出土した弥生甕の口縁部。内外面ともにナデ調整。にぶい黄褐色を呈し、焼成はやや不良。9は中門西側石塁の前面を清掃中通水口の石樋の下付近より出土した(図版29)土師器の坏片。口径13.2cm、器高3.1cmに復元でき、全体に薄いつくりで底部はそれがとくに顕著である。内外面ともナデ調整。胎土には1~2mm大の砂粒が含まれる。明赤褐色を呈し、焼成は良好である。10は中門西側石塁の下段上面を清掃中に出土した弥生土器の蓋。持手の部分の径は6.2cm。内外面ともにナデ調整。胎土に砂粒を多く含む。外面はにぶい赤褐色、内面は灰褐色を呈し焼成は良好。11は東門の門道部に設置したトレンチから出土した須恵器の甕の胴部片である。外面は平行タタキの後カキ目を施す。内面は同心円文当て具。内外面とも青灰色を呈し、堅く焼き締まる。12は東門の南東70mの登山道において表採された須恵器の甕等の胴部で頸部寄りの破片と推定される。外面は平行タタキの後、部分的にカキ目を施す。内面は同心円文当て具。胎土に石英粒を多く含む。外面は青灰色、内面には自然釉がかかり暗紫灰色を呈す。焼成は良好で堅く焼き締まる。13は第2東門門道床面より出土した(第48図)土師器の甕の口縁部である。口径は16.0cmに復元できる。胴部に比して口縁部が肥厚する特徴がある。外面から内面にかけてはヨコナデ、胴部内面はヘラ削りの後ナデ調整を施す。胎土にはわずかに砂粒を含む。外面は赤褐色、内面は明赤褐色を呈し焼成は良好である。14は第2東門の門道城内側の調査中埋土より出土した須恵器の坏蓋の破片。小片であるが小田編年のIIIB期に所属するものと考えられる。15は第2東門より出土した須恵器長頸壺である。第1次調査時のトレンチ調査で口径部から頸部にかけて出土し、第9次調査でさらに胴部片が出土し、両者が接合した。(第48図・図版42・52)口径10.2cm 胴部最大径17.9cmに復元できる。やや開き気味に立ち上がる頸部を胴部に差し込んで接合する。口縁部は外方にはほぼ直角に折り曲げ、端部をわずかにつまみ上げる。頸部には櫛目が施され、中位に二条の沈線が巡る。胴部は3本の条線で区分されその間に櫛状工



第53図 出土遺物実測図②(1/3)

具でななめ方向に1段づつ向きを変え3段に刺突文が施文される。最大径は胴部上位に置くが明瞭な稜は持たず丸みを帯びる。色調は明るい青灰色で焼きはややあまい。16は第2東門の門道部の調査中に出土。弥生土器あるいは土師器の胴部片。器種は不明。内面はヘラ削り。胎土は砂粒を多く含む、焼成は良好。17は第2東門前面の崩落石材の下から出土した弥生土器あるいは土師器。胴部であろうが器種は不明。1～3mmの石英粒子を多く含む。

18はA3トレンチの埋土中より出土。土師器と思われるが器種は不明。

19は礎石建物の北西トレンチより出土した須恵器片。細片で器種は不明だが須恵器の灯蓋か。灰色を呈し焼成は良好。20は礎石建物の北東トレンチから出土した土師器の皿の底部。器面が荒れ調整は不明瞭。2～5mmの砂粒を胎土に含む。内外面ともに橙色を呈し焼成は良好である。

以上が御所ヶ谷神龍石の出土遺物であるが、少ない遺物の中にあつて中期頃の甕類を中心とした弥生土器の出土が目立つ。これまで御所ヶ谷で弥生時代の遺構は確認されていないが一般的な集落が営まれたとは考えにくいこの場所と弥生人たちの関わりを今後調査検討していく必要がある。

出土遺物のなかで御所ヶ谷神龍石の築造年代を考える上で参考になるのは第2東門から出土した13の土師器甕と15の須恵器長頸甕である。概報ではそれまでに出土していた口縁部の特徴から7世紀第4四半期の年代を示したが、第9次調査で出土した胴部は肩に明瞭な稜を持たないことがわかり、7世紀の第3四半期まで遡るとみの方が良さそうである。13の土師器甕の年代も長頸甕と大きくは異ならないと考えられる。これらの遺物は城内で使用され遺棄されたものであろうが、それらが城門の床面や崩落土中より出土することは注意される。こうした出土状況は第2東門の機能がある程度低下した段階でこれらの遺物が投棄されたことを窺わせ、少なくともこれらの土器の所属年代にはこの城門が築かれていたと考えられる。

C5トレンチから出土した土師器についてみると、2の坏については所属年代を明確にできていないが八世紀代まで下るものであろう。6の皿については8世紀後半から9世紀前半まで下ることが考えられる。これらの遺物がそのまま城の維持管理された時期を示すと即断できる段階ではないが、今後の資料の増加を待って検討していきたい。

これまでの出土遺物は土器に限定されている。礎石建物が存在するにもかかわらずまだ瓦は確認されていない。ただ西田直養の随筆集である『柳村雜記』に「豊前国京都郡御所谷の瓦の内に碧色なる一枚おのれ藏せり」という記述があり、瓦の存在についても注意を払わねばならないであろう。遺物量が少ないのは調査地点と調査面積が限定であったことが大きな要因であろう。今後の調査で資料が蓄積されていくことによって、この城の性格や機能した時代も詳らかになることであろう。

註

- (1) 行橋市教育委員会「行橋市の文化財」第1集 1975 同 第2集 1976 いずれも定村資二作成
定村資二「御所ヶ谷神龍石」『北九州瀬戸内の古代山城』1983
石田孝「神龍石は祭祀遺跡である」『筑紫』第91号 1981
向井一雄「御所ヶ谷山城新発見遺構について」『清葉』21992
- (2) 行橋市教育委員会「史跡 御所ヶ谷神龍石保存管理計画策定報告書」行橋市文化財調査報告書第21集 1993
- (3) 宮崎栄輝「豊前御所ヶ谷神龍石探検記」『歴史地理』第15巻3号 1910
- (4) 定村資二は前掲の「行橋市の文化財」第1集では東門を北門と呼び換え現在の第2東門を東門としている。同第2集では旧来の呼称に戻っているが城内列石線に新たに第2西門を想定している。
- (5) 向井一雄「古代山城研究の動向と課題」『清葉』第9・10合併号 2001
- (6) 行橋市教育委員会「行橋市の文化財」第2集 1976

第4章 結語

調査の成果と問題点ならびに今後の課題を以下に整理し、結語としたい。

遺跡の特徴

御所ヶ谷神籠石は、しばしば実戦の機能に疑問が提起される神籠石式山城の中であって城壁として十分な機能を果たしうる規模と構造を備えた外郭土塁線が形成されている。城壁の上には姫垣等の遮蔽物を備えていたと推定されることや城門両側の土塁線を突出させる等、防御上有効なプランが採用され、そこには高い実戦的機能をもった城壁への進化が見て取れる。

土塁線の外観上の特徴としては列石が版築土塁中に埋め込まれることがある。列石に施された段差調整加工や前面の丁寧な加工から、当初露出させる計画であった列石が工法の変更により結果的に埋設されてしまったものと推定される。

このように工事過程での計画変更が随所に認められるのが御所ヶ谷神籠石の特徴であるが、その最たるものは城域の変更である。城内に残る未完成の土塁は築城当初おそらく北西部を画する外郭土塁として計画されたもので、この部分を含めた全周約 2760m が最初に計画された城域であったと推定される。築城工事の過程で防御正面の守りを強化するためにこのプランを変更し、峻険で守りに有利な北側に改めて約 600m の土塁を築造し全周 3030m の城域に拡張されたと考えられる。こうした北側の土塁や西門の築造は一連の築城工事の中で行なわれ、他の遺構と大きな時間的断絶は認め難い。新しい北西部の土塁に列石を採用しなかったことと列石を最終的に土塁に埋設したのも連動した計画変更だったのであろう。

石塁の石積みについては布積み（整層積み）と重箱積みの二種の手法がみられるが、中門や第2東門など二つの石積みが混在する遺構では、下部が布積みで上部が重箱積みとなっている。これは工区による石積みの手法の違いや崩落部分の積み直しではなく、この山城の工事過程で手間のかかる布積みから重箱積みへと石積みの技法が変更されたと考えた方がよいのではないだろうか。

以上のように御所ヶ谷神籠石は九州の神籠石式山城のなかでは城郭として一定の進化を遂げた形態を示し、防御機能の充実が認められること。また同一遺跡の中で城の縄張りやさまざまな工法の変遷がたどれることが大きな特徴といえるであろう。

御所ヶ谷神籠石の築城時期

文献によって明確な築城の経緯やその時期を特定できない九州、瀬戸内海沿岸の古代山城も近年中央政権の意思により、7世紀に築造されたという考え方に集約されつつある。しかし築城時期については大野城などの天智紀の山城と前後関係をめぐって意見が二分されている。

他の神籠石式山城と比べると御所ヶ谷神籠石については出土遺物も増えつつあるが、大野城などとの前後関係を決定づけるには遺物のみではまだ資料不足の感が否めない。ただし第2東門の出土須恵器からは7世紀の第3四半期にはこの城門が造られていた可能性がかなり高いことがわかる。

城の構造面からの編年の位置付けは城内施設や城門の調査の進展を待たねばならないが、土塁や石塁が高い機能を有し、城門部のプラン等にも実戦に即した配慮が認められることから、一定の築城理論を習得した段階の城という印象を受ける。しかし鬼ノ城、金田城、大野城の外郭線にみられるよう

な明確な埴城は認められないので、城郭の形式としてはこれらの城よりは一段階古い様相を示しているのかもしれない。また築城過程での計画変更からは状況に応じて縄張りや工法の軌道修正を重ねていった様子が窺える。

この城の工事計画の変遷を通ると、当初は入念に加工した切石列石や切石布積みの精緻を極めた城門石畳など視覚的要素を重視した城づくりへの志向が窺われる。その後、切石列石の埋設や簡易な重箱積みの採用、土塁への列石の不採用といった視覚面での精美さへのこだわりは排されていったようである。土塁下部の列石は雨水による浸食防止やカウンターウエートとしての役割を担っており、精緻な布積みも石畳の崩壊防止上有効性を持ち、見た目だけの問題でもないが、これらを犠牲にしても目指されたのが工期の短縮であったのであろう。これらの方向転換の契機は660年代の倭国の朝鮮半島出兵（百済の役）とその戦いの推移に求めたい。唐・新羅軍の侵攻の危機が現実性を帯びてきたことがそれまでの工法を変更してまで工期短縮を図る計画変更を促したのではないだろうか。白村江の敗戦以後の築城された天智紀記載の山城に神籠石式山城にみられるような手間のかかる切石列石や切石布積みの石畳が採用されないこともこれを裏付けていると考えられる。

こうした築城工法の変遷や出土遺物から総合的に考えると御所ヶ谷神籠石の築城着手は白村江の敗戦（663年）よりも遡り、戦後も一定期間工事が継続されたものと考えられる。

御所ヶ谷神籠石は完成していたのか

神籠石式山城の中には完成に至らず工事途中で築造を停止したと考えられるものも存在する。いわゆる朝鮮式山城と比べて極端に建物跡の確認例が少ないことも完成を疑問視する要因の一つとなっている。しかしこの点は外郭線の完成をもって一応工事を終え、兵舎や倉庫などは有事に際して緊急に建築することも考えられ、こうしたことも視野に入れ今後検証されるべき課題であろう。

本遺跡の場合、外郭城壁線は自然の要害を利用し築かれない部分があるにせよ、完成の域に達していたと捉えてよい。城内の施設については礎石建物跡や馬立場の貯水地状遺構があるが所属時期も含めて今後遺跡の全体的な調査の中で位置付けていかなければならない。先に述べたように主要な城内施設は有事に急造するとしても、城が完成していればそれを維持管理していくための必要最低限の建物は存在したはずである。それらを確認していくことや未調査の城門等の調査を進めていくなかで、この山城が完成していたのか、またいつ頃まで維持管理されていたのかも明らかになるであろう。

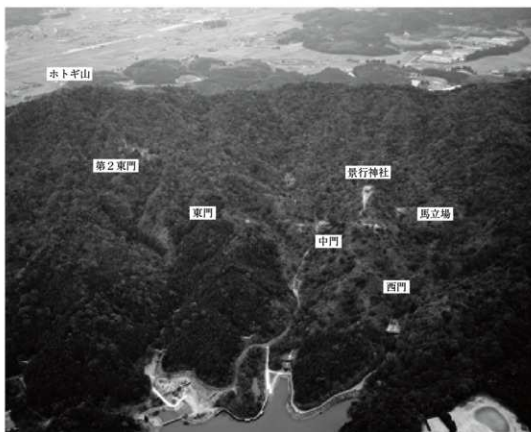
これまでの確認調査の段階では約35万㎡におよぶ遺跡を点的に調査した過ぎず、今後は保存整備と並行しながらさらに総合的な調査を行いたいと考えている、それによってまだ霞のかかったこの遺跡の姿もより鮮明になっていくものと期待される。

本書の結びにあたり、山中のテント等もない厳しい条件の中で厳冬、酷暑の季節を幾度も乗り越え調査に従事された方々、調査にあたってご協力いただいた土地所有者のみならず、地元関係各位に心より感謝申し上げます。

图 版



1. 北から見た神籠石の山並み



2. 北上空から見た遺跡主要部



1. 東門の北側



2. 東門の北側



3. 第2東門の南側



1. 列石と柱穴の検出状況



2. 列石と柱穴の位置
(上から)



1. 上空から見たトレンチ (一部埋め戻し後)



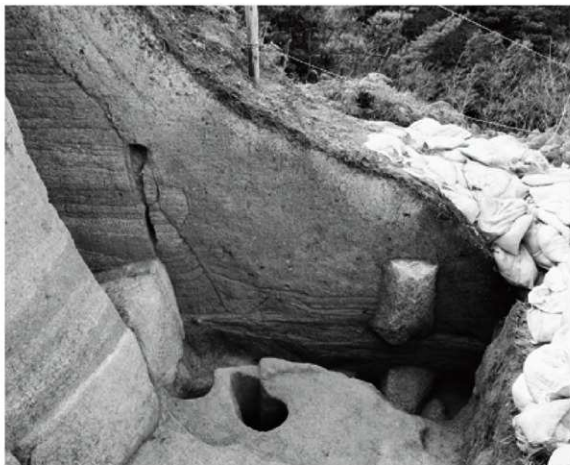
2. トレンチ掘削風景



3. 土塁前面の柱穴と列石



4. 列石の検出状況



1. 列石を覆う版築層とテラス部分の整地層



2. 背後から見たトレンチ



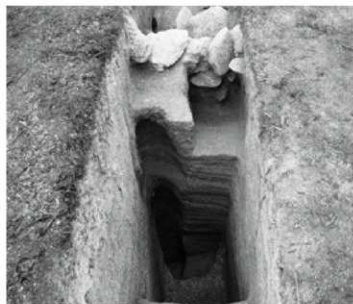
3. 土層の版築土層



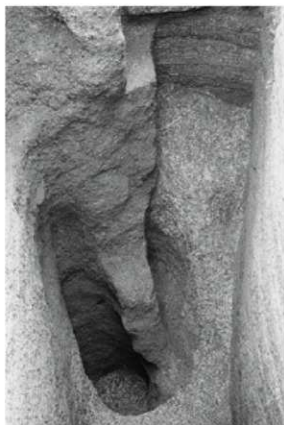
1. 土塁背面の石積み



2. 背面の石積と版築土層の関係



3. 土塁底部から立ち上がる柱跡



4. 地山に掘り込まれた柱掘りかた



1. A3 トレンチ (列石と柱掘りかた)



2. A3 トレンチ西断面



3. A4 トレンチ (列石と柱掘りかた)



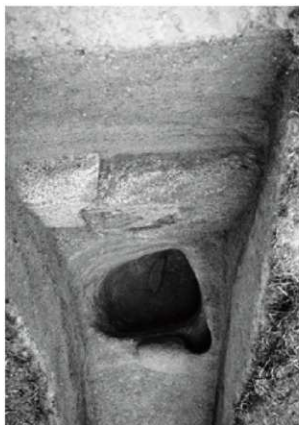
4. A4 トレンチ東断面



1. A5トレンチ (右) と A6トレンチ (左)



2. 列石と版築土層



3. 列石と柱掘りかた



4. 列石を覆う版築層



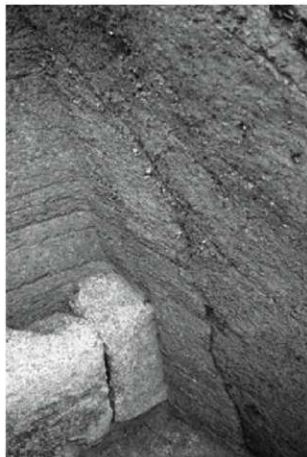
1. 列石と柱穴



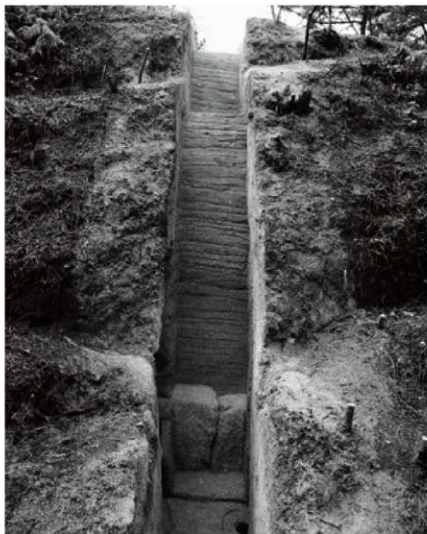
2. 上から



3. 列石、柱穴と版築層



4. 列石を覆う版築層



1. 列石と柱穴と土塁の土層



2. 地山に寄せられた後側の版築層



1. 列石と柱穴



2. 列石を覆う版築層



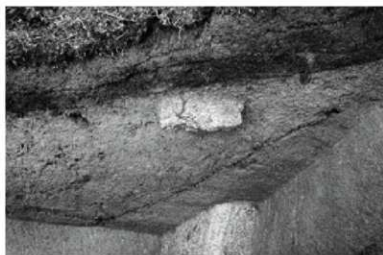
3. 後側の土塁中から検出された柱穴



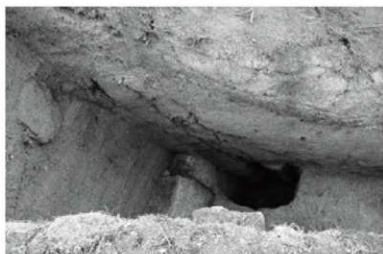
4. 土塁の後背面



1. 列石と柱穴



2. 南側断面



3. 北側断面と掘りかたと柱跡



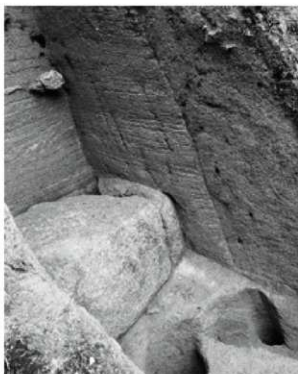
1. 正面から



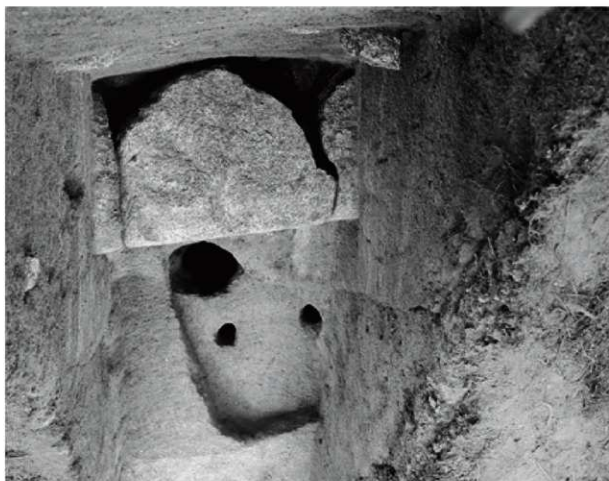
2. 東方向から



1. 南壁断面



2. 北壁断面



3. 上から見た列石の接合状況



1. 列石と柱穴



2. 上から

A 12 トレンチ



1. トレンチと北側の平野



2. 版築土層と柱跡

B 1 トレンチ



1. 土塁の後側 典型的な内托形態を示す



2. 掘りかたと柱跡



3. 地山のバイラン土と掘りかた

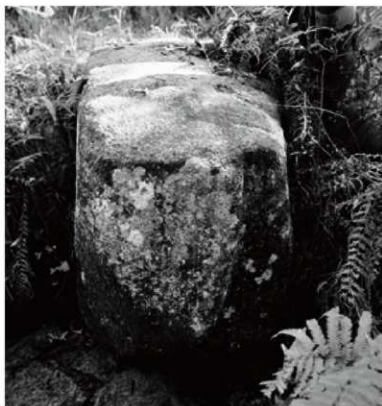


4. B2 トレンチ 西側の崩落崖面でも列石が無いことが確認された

B1 トレンチとその周辺



1. 原位置に残る列石



2. 溪流部にある加工石材



3. 原位置から動かされた列石石材

1. 谷の西側の列石
土塁が未完成であることがわかる



2. 谷の西側の列石

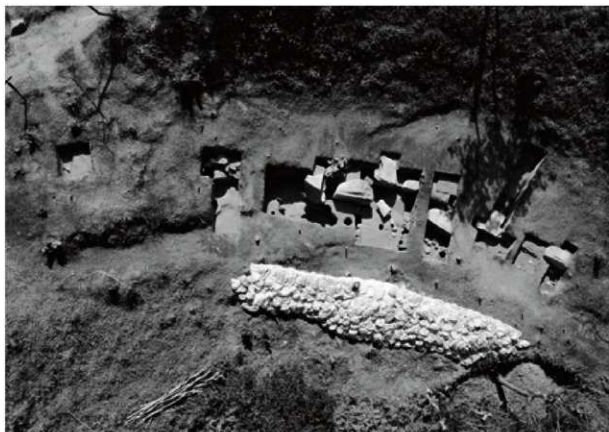


3. 西外郭線近くの列石状石材





1. C 地区遠景 右上は礎石建物跡のある丘陵 左手は A 地区の土塁線



2. 調査中の C 地区トレンチ



1. C地区の調査状況（南西から）



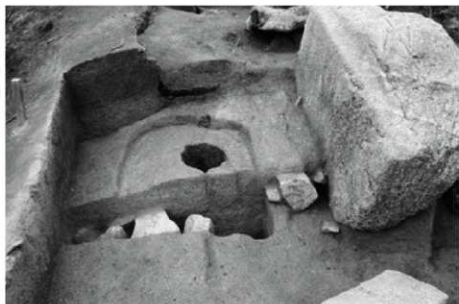
2. C地区の調査状況（東から）



1. C3トレンチ
西壁土層



2. C3トレンチ
列石と柱穴



3. C3トレンチ
柱掘りかた断面

1. C5 トレンチ
(北から)



2. C5 トレンチ
石材と後背面の版築土層



3. C5 トレンチ
土師器坏片の出土状況





1. C6トレンチ
列石と柱穴



2. C6トレンチ
列石と背後の敷居層



3. C1トレンチ柱穴検出状況
列石は抜き取られている



4. C2トレンチ柱跡検出状況
列石は抜き取られている



1. 遠景

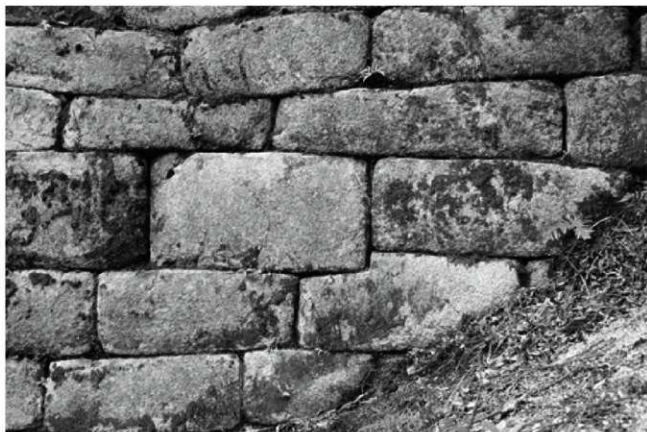


2. 俯瞰

中門 (1)



1. 西側の石塁



2. 石積み的手法



1. 北西より



2. 西より

中門 (3)



1. 城内側の石積み



2. 取水口

中門 (4)



1. 東側の石罫



2. 土師器の出土状況



1. 全景



2. 東側石塁



3. 西側石塁

1. 城門側より望む



2. 東側背面の状況



3. 西側背面の石塁
列石転用材が使用されている





1. 東門と列石線
(北西上空から)



2. 城門周辺
(真上から)



3. 城門側壁と土塁



1. 西から見た東門と土塁



2. 東門と土塁のトレンチ

東門の調査(1)



1. 南から



2. 西から
南側の側面と土塁は失われている



3. 側壁の石積み



4. 石積みの状況

1. 調査前の北側壁



2. 北側袖石の掘り下げ状況



3. 基底部の列石検出





1. 門道部のトレンチ



2. 土塁に設けたトレンチ
(A12トレンチ)



3. 柱跡の検出状況
(A12トレンチ)



1. 北上空より



2. 俯瞰

第2東門の調査(1)



1. 調査前



2. 横断面土層



3. 崩落状況断面

1. 縦断面



2. 側壁石材の崩落状況



3. 側壁石材の崩落状況
(後方から)





1. 南東側壁



2. 北西側壁



3. 城内に至る斜面

1. 袖石前面の柱穴

柱穴は袖石より高い位置から検出され
袖石前に柱が立っていたことがわかる



2. 門道床面の整地層



3. 門道床面の整地層





1. 須恵器長頸壺頸部出土状況



2. 須恵器長頸壺胴部片出土状況
城内前の床面より出土し1.の頸部片と接合した



3. 土師器裏片出土状況
城内床面より出土



1. 第2東門と北西側の土塁



2. 版築土塁と列石



3. 列石を被覆する版築土塁



1. 土塁前面の柱穴列検出状況



2. 土塁後方の柱穴列
列石が土塁上まで立ち上がっていたことがわかる



3. A13トレンチで検出された
柱掘りかた
掘りかたは土塁底部にあることから土塁を築造する過程で柱は立てられた

1. 南東石塁



2. 南東石塁と岩盤



3. 東石塁





1. 景行神社と礎石建物跡（西から）



2. 景行神社と礎石建物跡（俯瞰）

1. 調査前



2. トレンチ調査状況



3. 調査状況俯瞰





1. 列石特有の面取り加工のある礎石



2. 礎石と掘りかた



3. 列石特有の面取り加工のある礎石



4. 礎石と掘りかた



5. 礎石と掘りかた



6. 土師器の出土状況

1. 全景



2. 台石正面の銘文



3. 石祠背面、側面の銘文





1. 馬立場の石墓



2. 石墓背後の湿地



3. ヒモヅル
中門の北側の溪流沿いに自生



1



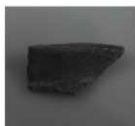
2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



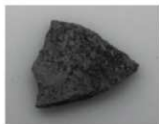
14



17



16



19



15



18



20

報告書抄録

ふりがな	しせきごしょがたにこうごいし							
書名	史跡御所ヶ谷神籠石							
副書名	福岡県行橋市大字津積ほか所在古代山城跡の第1次～第11次調査							
巻次								
シリーズ名	行橋市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第33集							
編著者名	小川 秀樹							
編集機関	行橋市教育委員会							
所在地	〒824-8601 福岡県行橋市中央一丁目1番1号							
発行年月日	2006年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ごしょがたにこうごいし 御所ヶ谷神籠石	ふくおかけんちゅうくほしし 福岡県行橋市 おおあざつづみ 大字津積 ほか	402133	140183	33度 40分 15秒	130度 56分 00秒	19931110) 20030325	20,000㎡ (測量調査含)	史跡内容 確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
御所ヶ谷神籠石	古代山城跡	飛鳥時代	土塁、石塁 城門跡、礎石建物跡		土師器、須恵器 弥生土器		国指定史跡	

史跡 御所ヶ谷神籠石 I

行橋市文化財調査報告書 第33集

2006年(平成18年)3月31日

発行 行橋市教育委員会

福岡県行橋市中央一丁目1番1号

印刷 はら印刷

福岡県行橋市大橋三丁目1番18号